377
130

始

服部擔風先生校閲

田口坎城學人講述

作詩講義

全

377-130

自叙

學人は從來作詩家のために、作詩の講義を爲したことは一再でない、その講義の要は、詩とは如何なるものであるか、詩は如何に作るべきものであるか、作詩の練習は如何にすれば良いか等の條目について述べることにしてあつた、諸同人中には、謄寫の勞を省かんがために、講義錄を剞劂氏に付さんことを慫慂するものがある、若しも其事が、多少なりとも斯道を益することが出來たならば、此上もない學人の滿足であると決意し、此頃閒を偸んで、草稿の體裁を繕ひ成し、玆に之を單行本として刊行することになつたのである、此書の來歷は已に斯くの通りであるから、大方博雅の覽に供すと云ふのではない、

戊午の初冬　楓外詩廬に於て

坎城學人識

大正
817
内交

目次

第一　詩の概念　一
1、詩とは何ぞ　一
2、詩の起原　二
3、詩の體制　五
第二　詩を作るの大意　一二
1、詩の題意　一二
2、詩式　一八
第三　韻と平仄　二二
1、漢字の聲韻　二二
2、通韻　四三
第四　句法　四六
1、句法の變化　四六
2、對句法　四九
3、煉句上の注意　五六
4、承襲と轉用　五八
5、集句　六三
6、聯句　六五
第五　字法　六七
1、字は詩句の元素　六八
2、拆字と倒用文字　七三
3、疊字と雙字　七六
4、雙聲と疊韻　七九
第六　聯法　八二

1、詩語　八二
2、故事故典の用法　八七
第七　絶句　九〇
1、絶句の體　九〇
2、絶句の平仄式　九五
3、絶句の格　一〇五
4、韻脚　一〇八
5、絶句の作例　一一三
第八　律詩　一一四
1、律詩の體　一一四
2、律詩の平仄式　一一六
3、律詩の作法　一二四
4、律詩の格　一二六
第九　排律　一三二
1、排律の體　一三二
2、排律の平仄式　一三四
3、排律の作法と作例　一三八
第一〇　古詩　一四一
1、古詩の體　一四一
2、古詩の韻法　一四三
3、古詩平仄法　一四七
4、古詩の韻法　一五二
5、古詩の諸格　一五五

作詩講義

坎城學人講述

第一　詩の概念

1、詩とは何ぞ

詩は志を言ふ、志とは心の之く所である、心に之く所あれば必ず言に形はる、其言に形はるゝが詩であると云つてある、詩經の毛萇傳にも、詩は志の之く所である、心に在るを志と爲し、言に發するを詩と爲すと云つてある、宋の朱子は詩傳に序して、人生れて靜なるは天の性なり、物に感じて動くは性の欲なり、既に欲あれば思ひなき能はず、既に思ひあれば言なき能はず、既に言あれば、言の盡す能はざる所にして、咨嗟咏嘆の餘に發するもの、必ず自然の音響節奏ありて已む能はざるは、此れ詩の作る所以なりと云はれた、文心彫龍に詩持也、

詩人性情とあるは、此間の消息を道破したもので、詩は胸に吾人の感興を發揮する所以のものであると云はねばならぬ、

詩人と俗人　詩は已に志を言ふもの、自ら作り自ら吟ずれば、其心を和らげ、其氣を平らかにするものである、他人に之を諷吟せしむれば、忽に作者の感興を移して、趣味を俱にすることを得らるゝものである、雷に然るのみならず、會心の友相集り、酒を酌んで清談し、茶を吃して閑話するの際、韻を探りて感を賦し、字を分けて興を述ぶるなどの雅味は、何物か之に加ふべき、花に鳴く鶯、水に鳴く蛙の聲を聞けば、生きとし生けるもの、いづれか歌をよまざりけるとは、貫之が古今集に序したる言葉である、人にして詩なかるべけんや、詩を解せざるものは俗人と云はねばならぬ、

2、詩の起原

擊壤歌と康衢謠　詩は已に人の性情に關するものであるから、詩の原を發したることは甚だ古く、漢土帝堯の世に、擊壤歌、康衢謠なるものがある、擊壤歌と云ふのは、

日出而作、日入而息、鑿井而飲、耕田而食、帝力于我何有哉、

の歌で、帝堯の世には、天下大に治まり、百姓無事であつた、此時に老人が壤を擊ちつゝ歌ひし所のものが此歌である、康衢謠と云ふのは、

立我蒸民、莫匪爾極、不識不知順帝之則、

の歌である、帝堯天下を治むること五十餘年、自ら其治平の如何を知らんと欲し、微服して康衢の間に遊び、民心の樣子を察せられしときに聞きし童謠が此歌である、次きの帝舜の世にも、皐陶と唱和したる賡歌と云ふがある、又次きの夏の世、殷の世にも、詩の謳るべきものが少くはないが、詩の著しい發達は、一般に周の代を俟たねばならぬ、

周代に於ける詩の發達　詩は周の代に至つて大に發達し、その體裁も備はるや

うになつたのであるが、大概四言を以て主としたものらしい、雷詩、詩を音樂に合はせて、朝廷宗朝に用ひたるものを雅と云ひ、頌と云つた、又民間から採用したる詩を風と云つた、これは採詩官なるものがあつて、民間にて歌ふ所の詩を採用し、之を天子に献じたものである、要するに其詩の如何によつて、人民の風俗を觀、人情の得失を察して、政治の助としたのであつた、此等の詩は、今存する所の詩經に載せてある、

孔子、詩を刪定す　　周の盛時には、詩は三千餘首もあつたと云ふことである、孔子が其中について、三百餘篇を刪定したるものが詩經に載せてある、即ち十五國風、大雅、小雅等の諸篇である、此詩經は實に後世詩賦の祖と稱せられ、又學問の第一要義として重んぜられてあつた、論語に興於詩と云つてあるのは、詩を誦するによつて、自然に善心を興すと云ふ義に外ならぬのである、又、詩三百、一言以蔽之、曰思無邪と云つてあるは、人能く誠を以て詩を作れば、善惡皆盡ありと云ふ義

に外ならぬのである、

詩經はもと三百十一篇あつたと云ふことである、秦始皇の時に、挾書律なるものを建かれ、中にも詩書の類を尤も忌みければ、一時全く詩の影を絶ちたりしが、漢の景帝の時になつて、此挾書律は幸に除かれたれども、詩經はまだ世に出でなかつた、文帝の世になつて、或は巖間より出で、或は壁間より出で、又人々の傳誦などから得ることになつたのである、今存する所の詩經は、景帝の子河間献王の博士たりし毛萇と云ふ人の傳ふる所のものである、其六篇は已に逸して、只三百五篇を存するのみである、所謂る詩三百とは、大數を擧げて云つたに過ぎない、

3、詩の體制

詩の體制は唐代に定まる　　詩は吟嘯咏嘆の餘に發するものであるから、前代古人の詩には、聲調も句數も字數も、格段に一定された極りはない、即ち一長一短參差として、變化無端の音節であつた、然るに人文次第に發達するに隨ひ、其變化無端

の中から、一種の音節を拔出し來つて、所謂る聲韻、即ち平仄の調子なるものも出來、同時に句數の長短、字數の多少なども、之を一定せらるゝやうになつたのである、詩の體制を著定せられたのは、唐代である、唐は實に詩の全盛時代とも云はれる、詩の體制を著定せられたのは、唐代である、唐は實に詩の全盛時代とも云はれてある、後人唐以後の詩を今體と稱して、詩の正格としてゐる、唐以前の詩をば古體と稱して、詩の變格と呼んでゐる、

詩の今體と古體　今體の詩は、律、排律、絶句の諸體を稱するもので、其句には五言もあり、六言もあり、七言もある、即ち律に五言律、七言律、排律に五言排律七言排律、絶句に五言絶句、七言絶句がある、此等今體の詩は、孰れも句の長短に論あり、又平仄にもそれ〳〵式があつて、法度の森嚴なるが常である、古體の詩は唐以前の古詩で、騷、樂府、歌行體などである、其句には三言もあり、四言もあり、五言六言七言もあつて、句の長短に拘らず、平仄粘せざる等が、今體と異つてゐる點である、

去國三巴遠、登樓萬里春、還家心江上客、不是故鄉人。
仄仄平平仄　平平仄仄平　平平仄仄仄　仄仄仄平平

これは唐の盧倫といふ人が、南樓望と題して作つた五言絶句で、四句二十字の詩である、

春時明月滿時關、萬里長征人未還、若使龍城飛將在、不教胡馬度陰山。

これは唐の王昌齡が、從軍行と題したる七言絶句で、四句二十八字の詩である、

寂寞掩柴扉、蒼苔對夕暉、鶴巢松樹遍、人訪道門稀、綠竹含新粉、紅蓮落故衣、渡頭燈火起、處處採菱歸。

これは唐の王維が、山居即事と題したる五言律である、即ち此詩は八句四十字で出來てゐる、

一上高城萬里愁、蒹葭楊柳似江洲、溪雲初起日沈閣、山雨欲來風滿樓、
烏下綠蕪秦苑夕、鄣鳴黃葉漢宮秋、行人莫問當年事、故國東來渭水流。

これは唐の許渾が咸陽城東樓と題したる七言律である、即ち八句五十六字の詩であ

る、

日落滄江晚、停レ橈問二土風一、城臨巴子國、臺沒漢王宮、荒服仍周甸、深山尚禹功、巖懸青壁斷、地險碧流通、古木生二雲際一、歸帆出二霧中一、川途去無レ限、客思坐何窮、

これは唐の陳子昂が、白帝城懷古の五言排律で、此詩は五言十二句で出來てゐるが、排律は大抵十二句以上のものが多い、

涇渭雲帆處處通、飄然舟似レ入二虛空一、玉杯淺酌迎初匝、金管徐吟曲未レ終、黃葉綿林寒有レ葉、碧琉璃水淨無レ風、避レ簷飛鳥翻翻白、驚レ鮫跳魚濺濺紅、淵雪歷多松偃蹇、巖泉滴久石玲瓏、書爲二故事一留二湖上一、吟作二新詩一寄二浙東一、軍府威容從レ遊盛、江山氣色定知同、報レ君一事君應レ羨、五宿澄波浩月中、

これは唐の白樂天が泛二太湖一記レ事寄二微之一と題する七言排律で、句數は十六句で出來てゐる、

長安一片月、萬戶擣レ衣聲、秋風吹不レ盡、總是玉關情、何日平二胡虜一、良人罷二遠征一、

これは唐の李白が子夜吳歌と題する五言六句の古詩である、

去年燕巢主人屋、今年花發路傍枝、年年爲レ客不レ到レ舍、舊國存亡都得レ知、

胡塵一起亂二天下一、何處春風無二別離一、

これは唐の薛業が洪州客舍寄二柳博士旁一と題する七言六句の古詩である、

唐代の詩人　以上例示する所の詩は、何れも皆唐人の作であるが、唐代には如何なる詩人がありしかを、略ぼ知り置くの必要があると認めて、次に其大要を紹介せん、

唐は、初唐、盛唐、中唐、晚唐に區分して、詩人を別つが通例である、初唐とは高祖以後眞宗の初に至るまで、盛唐とは眞宗以後代宗の初に至るまで、中唐とは代宗以後文宗の初に至るまで、晚唐とは文宗以後を云ふのである、

初唐の詩人には、沈佺期、宋之問などが出でて、韻學なるものゝ研究に趣味を發揮

し、六朝の詩體を律するに法度を以てして、平仄厳に一定の式を用ひ、音韻を調ふることゝして出來たのが、所謂る律詩であつた、又厳格なる平仄式の下に法度を定められたる絶句も出來て、獨立の詩體を成すやうになつたのであるが、此時代を以て詩の古體と近體とを別せられたのであるから、洵に詩の大變遷と云はねばならぬ、

初唐には陳子昂が出でゝ、古體詩を作つたが、それは一異彩であつた、初唐を代表する詩人には、前に述べた沈宋二人の外に、王勃、楊炯、盧照鄰、駱賓王などがあつた、此四人は七古長篇の立派なものを作つた、之と同時に杜審言、李嶠、張說、張九齡などが輩出した、

盛唐は讀んで字の如く、詩の全盛時代である、後の有名なる杜甫、李白は、實に此時代に出たのである、杜甫の詩は百代を籠絡し、群像を包括すると云つてよい、後世の詩家は、其出入の門戸は同じからざるも、何れも皆杜甫を以て本宗としてゐる、李白は超越なる天才に任かせて、詩も亦飄逸奇肆と稱せられてある、殊に其絶句は、古今獨歩と稱せられてゐる、李杜二人は實に千古の大詩人である、李杜以外の大家には、王維、孟浩然、儲光羲などがあつた、又其前後に、高適、岑參、崔顥、張謂、賈至、常建などがあつた、又李欽の七言律、王昌齡の七言絶句は、實に一世に雄視すと云はれた、

中唐に於ける詩人は、韋應物、柳宗元などがあつて王孟と并稱せられたが、更に大家としては、韓退之、白居易があつた、韓退之の詩名は文名に拉はれたるやうであるが、其詩は宏壯にして奇崛である、白居易は即ち白樂天で、暢達平易の詩を特色としてゐた、此等の外に、張籍、李賀、劉禹錫などがあつて、何れも中唐の大家と稱せられてゐる、

晚唐の詩人には、李義山、杜牧川があつた、又許仲晦、溫飛卿、段成式、皮日休、陸龜蒙などの詩人も輩出した、殊に李溫殷三人の詩風が、天下を風靡したが、三人

共に排行十六であつたから、其詩を俗に三十六體と呼んでゐた、斯くて唐末より五代に至つては、詩風も漸く纖弱に流るゝやうになつて、復見るに足るべきものがなかつた、

第二　詩を作るの大意

1、詩の題意

詩題は限りなし　詩の題は、自然界人事界に亘つて限りのないものである、之を大にしては宇宙國家の事態より、之を小にしては露花風月、日常茶飯事に至るまで、皆詩題に入らざるはない、詩作は有らゆる此等の題を捕へ來つて、感興を綴り表はすものであれば、其著筆も亦事に由り物に隨つて、其趣を異にすべき筈であるから、詩を作らんには、先づ其題意を看取することが必要である、題意を看取すると云ふことは、即ち詩思をして其事物境遇に切實ならしむるの謂ひである、登高遠眺のやうな詩題は、其氣象が遠大なるだけ、趣味が多い、遊冥歡娛の類は、四境の風致を叙し、或は美酒佳肴、或は塵外自適の趣味を抒べて感興を言ふべきである、又尋訪の詩題の如きは、途中の景色、其人の居處の模樣、其人格などに言ひ及ぼすもよい、送別留別などの詩題は、交情を主として述べ、他日の再會を期するとか、音信を待つとかを述べ、又其人の行く先きの幸福、途中の樣子などを加ふるもよい、逢迎の類は、互に相逢ひ相迎ふるの娛意を悉くして、交情の濃かなるを表するやうにすべく、憑吊の類は、其人に對するに深情哀感を以てすべく、古戰場、遺蹟の類は、四邊回顧の情を發揮して、撫今思古の意味に注意するがよい、寄酬は相思を人に寄せ、又人に酬ゆるものであるから、慇懃に情思を叙し、敬意を失はぬやうにするがよい、其他富貴豪奢のこと、美人才子のこと、神仙隱逸のこと、園林宮殿のこと、花木禽獸のこと、鮮介昆蟲のことなど、種々雜多であるが、要は皆着想を適當に工夫せねばならぬのである、詩を學ばんものは、務めて多く古人の詩を讀み

之を細かに玩味することが、作詩上肝要のことである、

賦　題意を把つて之を詩藻に言ひ形はすには、賦、比、興の三様あることを知らねばならぬ、賦と云ふのは引き延ぶる意味で、心に思ひし事を明らかさに引き延べて言ひ形はすのである、換言すれば、目の見たる所、耳の聞きたる所を、比喩などを用ひないで、有の儘に述べ盡くすと云ふのである、陸放翁の句に、

山從三衆鳥行邊一出、天向二平蕪盡處一低、

と云ふ句がある、これは山の高いことや、天の遠いさまを有のまゝに陳べたのである、杜牧の詩に、

千里鶯啼綠映レ紅、水村山郭酒旗風、南朝四百八十寺、多少樓臺煙雨中、

とあるは、四句皆有のまゝに、眼中の景致を述べた詩である、此やうなのが賦の作法である、

比　比と云ふのは比喩のことである、これは物を他に比ちべたり、喩ひを引いたりして、有の儘に言はぬ作り方である、美人のことを言はんとして花に比ちべ、花の美なるを言はんとして、美人に喩ふるやうなものを言ふのである、

麗宮春滿草色、紅裙妬殺石榴花、

の句は、美人の眉の濃かなるを形容して、萱草の綠色なるに比ちべ、紅裙の色を石榴花の紅なるに喩へたのであるから、此の作り方である、又蘇東坡が蓮華の詩に、

酒醒病客惟愁レ睡、雲動黃蜂亦類レ飛、

の句がある、前句は賦で言ひ形はしたる自分の境遇であるが、後句は黃蜂の飛ぶに類しい樣を自分に引き寄せて、言ひなるにて、比の句法である、

興　興とは感興を引き興すと云ふ意味である、淵水東流去、何時到レ秦州、と云ふ句は、淵水の東に流れ去るのを見て、自分が故郷に歸ることの出來るのは何時であるかと益に感興を發した作である、

天衢夜靜星初落、禁闕曉聲夢未成、

は、寒夜に寂然として眠の成らざる風興を述べたものである、詩篇は斯く賦、比、興の何れにて言ふもよいが、但其意は可成言外にあるやうに、含蓄と云ふことに意を致すを貴ぶのである、

題意についての逸話　玆に詩の題意を述ぶるについて、一つの逸話を紹介しやう、或人が作詩の法を或詩人に尋ねたるとき、詩人は俳諧の作法を例に引いて答へられたと云ふことである、其俳句は

板の間に下女ゐ落す海鼠かな

と云ふのを師匠に示したとき、師匠は献立道具が多いと云はれた、ソコで、

板の間に取落したる海鼠かな

と直して師匠に示したるに、まだ道具立が多いと云はれたので、最後に、

取落し取落したる海鼠かな

とやつて、板の間、下女などの道具立を皆削り去つてしまつたので、始めて餘情が言外に溢るゝことゝなつた、其處が俳諧の妙處で、作詩も亦これと同じ事であると言はれたとのことである、之を玩味すれば、詩作の神機を悟ることを得るに庶幾からん、

初學者が詩を作るは、最初から一つの詩の趣向が纏つてゐるものでは無い、唯詩作本即ち韻本中の字を拾ひ集め、平仄を式に合はせて、二十字又は二十八字を成すのに過ぎぬものであるから、詩句の連續しないことや、詩意の通じない所があるのは、到底免かれ難いことである、如何なる大家でも、當初は皆左樣であつたのである、斯くて詩境漸く進むに從つて、詩句の連續も、詩意の通達も、次第に工夫し得らるゝやうになるのであるから、詩を作らんものは、古人の詩を多く讀むことを勉め、且多作を努むるがよい、初學者輒もすれば、自家製作の詩語を用ひて物珍なる理窟を敍べたがるものであるが、甚だ面白くないことである、詩語は韻本に載する所のものを用うるか、又は古人の詩中より摘用するやうに工夫すべきである、詩作

には詩韻含英異同辨は必携の韻本である、併し其の初學者は、平仄の區別が分らぬのであるから、幼學便覽とか、詩語粹金などを手引とするがよい、詩韻含英異同辨の外には、韻府一隅、詩韻珠璣、圓機活法なども、座右に缺くべからざる韻本である、又讀むべき古人の詩集は、先づ以て唐詩選、唐三體詩などを第一とせねばならぬ、フクツケキニ耳ヨ

例 合、煙、律、一、年

2、詩式

釋皎然の詩式　唐の釋皎然と云ふ人が、詩式なるものを撰述してある、作詩家を益する所が少なくないから、左に之を抄出しやう、

△詩に四不有り

氣高ぐして怒らず、　怒れば風流に失ふ、

力勁くして露はさず、　露はさば斤斧に傷つく、

情多くして暗からず、　暗ければ捕風に陥づく、

才贍にして疎ならず、　疎なれば筋脉に損ふ、

△詩に四深有り

氣象氤氳は、體勢に深きに由る、

意度盤礴は、作用に深きに由る、

用律滯らざるは、聲對に深きに由る、

用事直ならざるは、義類に深きに由る、

△詩に四離有り

道情を期すと雖も、而かも深僻を離れよ、

經史を用うと雖も、而かも書生を離れよ、

高逸を尚ぶと雖も、而かも迂遠を離れよ、

飛動を欲すと雖も、而かも輕浮を離れよ、

△詩に六迷有り

虚誕を以て高古と爲すは迷、
緩慢を以て冲澹と爲すは迷、
用意を錯るを以て獨善と爲すは迷、
詭怪を以て新奇と爲すは迷、
爛熟を以て穩約と爲すは迷、
氣少力弱を以て容易と爲すは迷、
△詩に六至有り
至險にして僻ならざれ、
至奇にして差はざれ、
至麗にして自然なれ、
至苦にして跡無くあれ、
至近にして意遠くあれ、

至放にして迂ならざれ、

△詩を學ぶの工夫　唐人が詩を作るには、皆苦思したものである、吟安一箇字、撚斷數莖鬚などの句のあるを見ても分かる、凡詩を學ぶの工夫は、汎く學問に涉らねばならぬ、清人が言つたことがある、即ち才あつて學なきは、絶代の佳人が蓮花落を唱ふるやうなものである、學あつて才なきは、長安の乞食が宮錦袍を着たやうなものであると、如何にも詩を學ばんとするものは、先づ學を以て根柢とせねばならぬ、根柢を養はないで、花實の美を收めやうとするのは、そも〳〵末である、才性は先天に得るもの、學問は後天に得るものなれとも、先天已に才性がなく、後天亦學問がなくんば、造詣を期することは勿論出來ない、杜少陵の詩に、讀書破萬卷下筆如有神とある、人能く學を以て才性を養ひ、才性を以て學を廣め、兩々相待つて詩の用を爲し、決して偏廢すべきものにあらざるを知らば、始めて詩を學ぶものと云はれる、

第三　韻と平仄

1、漢字の聲韻

四聲　漢字には聲韻と云ふがある、これが漢字の特色としてある、所謂る詩の平仄なるものは、此聲韻の舒促によつて區別せられたものである、作詩には先づ此平仄を知らねばならぬ、多數の漢字は、其字に於ける聲韻の響きによつて分類し、一百六韻となされてある、有らゆる漢字は、此一百六韻に分屬してゐる、

韻が已に定まれば、其詩の清なると濁なると昂なると低なるとによつて、之を四聲に纏めてある、四聲とは、平聲、上聲、去聲、入聲のことで、平聲と云ふのは、其音節の平暢にして低昂なきもの、上聲と云ふのは、其音節が高く揚つて强きもの、去聲と云ふのは、其音節が低く下がつて清ゆるもの、入聲と云ふのは、其音節が短促して急に收まるものである、この上、去、入の三聲は、何れも皆促音なれば、此三聲を合せて仄聲となしてある、平聲は又上下二聲に分類してある、上平聲が十五韻、下平聲が十五韻、合せて三十韻ある、上聲は二十九韻、去聲は三十韻、入聲は十七韻、總計一百六韻としてある、

韻字　以上四聲の分類を大成したる人は、梁の沈約と云ふ人であるから、後世之を沈約の四聲と云つてゐる、今左に一百六韻の名稱を列記せん、

上平聲は十五韻

一東　二冬　三江　四支　五微　六魚　七虞　八齊　九佳　十灰　十一眞

十二文　十三元　十四寒　十五刪

下平聲は十五韻

一先　二蕭　三肴　四豪　五歌　六麻　七陽　八庚　九青　十蒸　十一尤

十二侵　十三覃　十四鹽　十五咸

上聲は二十九韻

一董　二腫　三講　四紙　五尾　六語　七麌　八薺　九蟹　十賄　十一軫
十二吻　十三阮　十四旱　十五潸　十六銑　十七篠　十八巧　十九皓　二
十哿　二十一馬　二十二養　二十三梗　二十四迥　二十五有　二十六寢
二十七感　二十八琰　二十九豏

去聲は三十韻

一送　二宋　三絳　四寘　五未　六御　七遇　八霽　九泰　十卦　十一隊
十二震　十三問　十四願　十五翰　十六諫　十七霰　十八嘯　十九效　二
十號　二十一箇　二十二禡　二十三漾　二十四敬　二十五徑　二十六宥
二十七沁　二十八勘　二十九豔　三十陷

入聲は十七韻

一屋　二沃　三覺　四質　五物　六月　七曷　八黠　九屑　十薛　十一陌
十二錫　十三職　十四緝　十五合　十六葉　十七洽

四聲一百六韻は以上の如くであるが、此等の平聲仄聲は、邦人には容易に判別し兼ねるものであるから、平仄を知らんとするには、經驗上自然に習得するより外に手段はない、初學者が平仄に苦むと云ふのもこれが爲である、併しながら少しく辛抱して詩作を努むれば、間も無く了得するに至るものであれば、決して辟易するには及ばぬ、但知り置くべきことは、仄字中の入聲に屬してゐる字音は、フ、ツ、ク、チ、キの音を以て終つてゐるから、其假名遣ひによつて、直に其文字が入聲であることが分かる、即ち十ジフ、葉エフ、筆ヒツ、物ブツ、北ホク、目モク、日ニチ、七シチ、識シキ、石セキなどのやうである、

兩韻　多くの漢字は、其意義の異なるによつて、平聲に使つたり仄聲に使つたりするものが澤山ある、又平聲にも仄聲にも通用するものも少くない、それ等を知らんとするには、詩韻含英異同辨について見るが便利である、今茲に作詩上近く使用することの多い字面を抄出して、初學者索覽の便に供せん、

一 東

平

中。うち、なか、
風。かぜ、
空。そら、むなし、
夢。くらし、ー一、雲ー、
虹。にじ、
凍。こほる、與ー凍異、
龍。こむる、ー一罩、

二 冬

重。かさなる、
從。したがふ、

仄。

あたる、射る、巧ー、射ー雀ー、刑罰ー、
諷同、ー誦、嘲ー、ー諫、
あな、かく、むなしくなる、塡ー、闕ー、屢ー、
ゆめ、

おもし、おもんず、責ー、持ー、鴻毛ー、
隨行也、供ー、待ー、

平仄兩用

にじ、
こほる、暴雨の貞
かご、蓁ー、鵝ー、

ふたゝび、ー見の類、

草生ずる貞
與ー恭同、そなふ、うやう
やし、
たて、ー横、
水のかたち、
おそるゝさま、
こほろぎ、きりぎりす、
作ー蛩、
ぬふ、尙可ー、

三 江

降。くだる、くだす、ー伏、
心ー、

四 支

爲。なす、せらる、
吹。ふく、

あつまる、
ともに、公ー、天下ー、
笑語ー、
ほしひまゝ、放ー、豪ー、
天ー、遊目ー、

ぬいめ、無ー、衣ー、

升ー、霜ー、神ー、

ため、何ー、誰ー、
ふく、鼓ー、蛙ー、

水のかたち、
おそるゝさま、
こほろぎ、きりぎりす、

空ー、横ー、

皎。つゝみ、
施。しく、設ー、
遲。おそし、
遺。わするゝ、のこす、陳迹也、
騎。跨馬也、堪ー、借レ馬ー、
治。をさむ、補ー、醫ー、
墮。やぶるゝ、頽ー、殘ー、
麗。音り、附著也、纖ー、高ー、
氏。國名
戲。あゝ、於ー、
思。おもふ、再ー、夢ー、苦ー、

五 徵

かたむく、偏ー、
まつ、喜ー、夕ー、
おくる、路ー、問ー、加ー、厚ー、
騎乘也、野ー、驛ー、
をさまる、自ー、大平ー、唐虞ー、
おつる、指ー、月ー、涙交ー、
音れい、うつくし、美ー、江山ー、
うぢ、
たはむる、
おもひ、念也、詩ー、酒ー、文ー、
ほどこす、厚ー、薄ー、

菲。かぐはし、芳ー、春ー、
誹。そしる、
歎。なきむせぶ、
幾。ほとんど、きざし、ちかし、ー微、
衣。きもの、ー裳、

六 魚

予。われ
疏。まれ、疎也、作レ疎、
除。のぞく、庭ー、謂二門屏之間一、拜レ官曰レー、
與。か、疑詞、作レ歟、
書。ほまれ、
狙。さる、
くさしげる、うすし、
そしる、
なきむせぶ、
いくばく、ー何、
きる、解レ衣、
あたう、
ときあかし、奏レー、
暗ー、
去る、日月ー、風雨ー、
あたふ、あづかる、
ほまれ、
さる、

噓。氣を吹く、　氣を吹く、
淤。どろにごる、　どろにごる、泥ー、
醂。錢を出しあひて酒を飲む、　錢を出しあひて酒を飲む、ー金、
衝。行く貝、官衝のときは六麻の韻　行く貝、ーー、
沮。水名、姓、　とどむ、志ー、氣ー、

七　虞

輸。おくる、やぶる、ー扇、　おくりもの、にもつ、
鋪。しきつらね、　みせ、舗同、店ー、
鱸。劍名、音る、　ちりばむ、音ろう、
句。地名、　くぎり、字ー、
嘉。いづくんぞ、語詞、　あしい、にくむ、
帑。くら、　くら、金帛所レ藏、

瘀。いゆる、　いゆる、
黠。さけ、　さけ、
汙。けがる、作レ汚、　けがる、垢汙、泥ー、粉ー、
鄙。はする、　はする

八　齊

妻。つま、　めあはす、
泥。どろ、　なづむ、拘ー、
緯。むすぶ、　むすぶ、深ー、自ー、
徠。待つ、　待つ、
霓。にじ、　にじ、又作蜺、

十　灰

回。かへる、めぐる、　曲る、避くる、

隗。たかし、		たかし、
嵬。たかし、		たかし、崔ー、
裁。製し衣也、たつ、	製ー、風ー、殊ー、	

十一真

親。したしむ、おや、	ー戚、	
振。ふるふ、あがる、	をさむ、	ふるふ、あがる、玉ー、
畛。田間の道、		戚ー、田間の道、

十二文

聞。きく、耳知ー聲也、	きこへ、ほまれ、令ー、聲ー、	
分。ー別也、あたふ、平ー、區ー、	名ー、職ー、天ー、	
斤。目方、	ーーは線也、	
貴。大也、十三に元の韻は勇也、	貴ひ、飾也、ー臨、	

十三元

論。ろんずる、討ー、空ー、講ー、	論を立て、評の極まりたるは仄、議ー、推ー、	
媛。みめよき女、うつくし、		みめよき女、うつくし、
晉。かさなる、さらに、	宿ー、何ー、報ー、	かさなる、さらに、更ー、數ー、
怨。うらみ、仇ー、	たすく、接ー、結ー、高ー、攀ー、	
援。ひく、引ー、		
紈。うねりまがる、		うねりまがる、
噴。はく、		はく、

十四寒

翰。ふみ、つばさ、		ふみ、つばさ、羽ー、文ー、
難。なやむ、かたし、難ー、一字ー、	はばかる、かたんずる、患ー、殉ー、内ー、	
彈。はじく、たんずる、	たま、ー丸、	

歎。なげく、
看。みる、
觀。みる、
浸。ひろし、はびこる、
冠。かんむり、衣ー、衝ー、
汗。河ー、首ー、
浚。あざむく、あなどる、
誅。さす、

しめす、みもの、京ー、
建ー、寺ー、壯ー、
かしら、爲二衆之首一也、
風流ー、
あせ、

なげく、
みる、
ひろし、はびこる、汗ー、
散ー、
あざむく、あなどる、
さす、刺ー、研ー、

十五劃

間。あひだ、ひと、中ー、世ー、
清ー、
淚。涙出る貝、
患。うれふ、

しはる、へだつ、離ー、
戾ー、

涙出る貝、湯ー、雨ー、
うれふ、

一先

先。まづ、さき、ー後也、
蕊。圖名、
縣。かゝる、懸同、
便。やすし、安ー、
鄙。坐ー、學ー、
緣。ゆかり、ちなみ、
潺。水の流るゝ貌、
屑。よわし、
旋。かへる、とく、すみやか、
嶼。ふさぐ、鼓聲、
篤。つたふ、ー授、

さきだつ、後なるべくして前なるなり、
つばめ、
あがた、郡ー、
すなはち、たより、利ー、
封ー、唐虞ー、
へり、ふち、衣ー、
めぐる、
列ー、紀ー、學ー、

水の流るゝ貌、
よわし、
ふさぐ、塞ー、

咽。ー喉、　　音えつ、ひせぶ、
扁。小舟也、　　ー額、
膈。あほる、おだつ、　　あふぎ、開ー、
卷。まがる、曲也、　　まきもの、書ー、
研。とぐ、みがく、すずり、　　とぐ、みがく、磨ー、

二　蕭

挑。うつ、になふ、ひらく、　　かろがろし、いどむ、
調。とゝなふ、　　しらべ、聲ー、改ー、
夭。多才の貞、ーー、　　わかじに、壽ー、
僚。とも、同ー、　　山ー、野ー、
燒。やく、もゆ、香ー、
侥。ぬすむ、かりそめ、　　とも、同ー、
　　ぬすむ、かりそめ、輕ー、

要。たふる、もとむ、　　かなめ、樞ー、握ー、
料。ー理、　　詩ー、材ー、
徼。もとむ、むかう、　　くにざかひ、海ー、邊ー、

三　肴

敎。せしむる、　　をしへ、ー訓、
鈔。うつす、かきぬく、　　うつす、かきぬく、同ー抄、
敲。たゝく、推ー、　　たゝく、推ー、

四　豪

操。持つ、とる、あやどる、　　みさを、貞ー、志ー、
潔。ー、高ー、　　なづくる、大ー、名ー、
號。さけぶ、なく、よぶ、　　ねぎらふ、慰ー、
勞。つかる、告ー、憚ー、

五　歌

和。やはらぐ、春ー、ー調、
荷。はすのは、
唐。みがく、豚ー、
邕。すぐ、よぎる、經ー、
柯。轗ー、孟ー、
郝。おほし、やすし、なんぞ、
戲。けはし、

六麻

些。すくなし、
樺。木名、かば、

七陽

長。ながし、短ー、心ー、萬候ー、

とゝなふ、聲相聯也、附ー、唱ー、
にぬふ、にもの、嬢ー、
うす、薄也、
あやまち、とが、すぎたり、改ー、告者ー、

轗ー、孟ー、
けはし、ー、嬢ー、

語助、誰能ー、

楚ー、

木名、

をさ、たけ、あまり、ゐ
ぼし、ー物、師ー、ー幼、
百夫ー、

歌。かくす、をさむ、よし、
相。あひ、あふ、ともに、かへる、みる、質也、金玉ー、
劍。きづつく、
忘。わする、
望。のぞむ、
債。つぐなふ、
堅。すこやか、つよし、堅ー、
蹶。蹶躓ー、
行。つらなる、行列也、行くは八庚の韻、
將。ゆく、もつて、おくる、たすく、まさに、
障。へだつ、まもる、
量。はかる、評ー、稱ー、
湯。水の流るゝ貌、

くら、實ー、庫ー、倉ー、
みる、たすく、ー人、將ー、宰ー、
はじむ、こらす、

わする、
のぞむ、
つぐなふ、

しゆる、ことはし、勉ー、
木ー、輔ー、
おこなひ、めぐる、巷ー、
德ー、
ひきゐる、大ー、部ー、
ー帥、

へだつ、まもる、保ー、
屏ー、

心のひろき、雅ー、器ー、
熱ー、

浪。汪ー、滄ー、　なみ、みだり、孟ー、
防。ふせぐ、　ふせぐ、
吭。鳥の喉、　鳥の喉、
爽。も、　うしなう、ほろぶ、
風。あがる、　あがる、風ー、茶煙ー、
彷。かたはら、還ー、　よる、そふ、依ー、

八　庚

横。よこ、よこたはる、　ほしひまゝ、暴ー、强ー、
評。あげつらう、しなさだめ、　あけつらふ、しなさだめ、
更。かはる、あらたむ、ー迭、　さらに、ふたゝび、時間ー、相見ー、
盛。もる、もりもの、　さかん、
正。ー朔、　まさに、たゝし、

并。あはす、　ならぶる、ー植、
令。せしむる、地名、使ー、　よし、命也、律也、號ー、軍ー、政ー、縣ー

九　青

廷。朝ー、外ー、　朝ー、外ー、
醒。さむる、　さむる、
蜻。きく、　きく、
屏。おほふ、ー風、　しりぞく、のぞく、退ー、徹ー、

十　蒸

應。まさに、べし、　こたふ、山鳴谷ー、
徵。めす、しるす、さひはひ、　音ち、五音の一、
勝。たふる、あげて、不ー、能ー、　かつ、まさる、すぐる、決ー、大ー、名ー、
凝。こる、むすぶ、　こる、むすぶ、

鼻。おこる、たつ、中ー、隆ー、
稱。はかる、あぐる、なづくる、
凭。よる

比ー、ー越、憑ー、詩ー、
かなふ、はかる、
不ー、名實ー、

よる、

十二侵

任。たふる、になふ、
禁。たふる、難ー、

まかす、委ー、
とゞむ、いましむ、ー止

たふる、になふ、

十三覃

三。みつ、數名、

みたび、ー思、ー復、

十四鹽

占。うらなふ、吉ー、
酒。ひそむ、かくる、
漸。ひたす、化ー、東ー、

しむる、ー領、口ー、

ひそむ、かくる、

やうやく、すゝむ、ー次、

厭。あく、たる、厭ー、
苦。とま、

いとふ、ー案、

とま、

十五咸

帆。ほ、
讒。ざんげん、そしる、

ほ、
ざんげん、そしる、

平聲の通韻

一東二冬三江は通用、
四支五微八齊九佳十灰は通用、
六魚七虞は通用、
十一眞十二文十三元十四寒十五刪一先は通用、
二蕭三肴四豪は通用、
五歌六麻は通用、

七陽は獨用、

八庚九青十蒸は通用、

十一尤は獨用、

十二侵十三覃十四鹽十五咸は通用、

上聲の通韻

一董二腫三講は通用。

四紙五尾八齊九蟹十賄は通用。

六語七麌は通用、

十一軫十二吻十三阮十四旱十五潸十六銑は通用、

十七篠十八巧十九皓は通用。

二十哿二十一馬は通用、

二十二養は獨用、

二十三梗二十四迥は通用、

二十五有は獨用、

二十六寑二十七感二十八琰二十九豏は通用、

去聲の通韻

一送二宋三絳は通用、

四寘五未八霽九泰十卦十一隊は通用、

六御七遇は通用、

十二震十三問十四願十五翰十六諫十七霰は通用、

十八嘯十九效二十號は通用、

二十一箇二十二禡は通用、

二十三漾は獨用、

二十四敬二十五徑は通用、

二十六宥は獨用、
二十七沁二十八勘二十九豔三十陷は通用、
入聲の通韻
一屋二沃三覺は通用、
四質五物六月七曷八黠九屑は通用、
十藥は獨用、
十一陌十二錫十三職は通用、
十四緝十五合十六葉十七洽は通用、

第四句法

1、句法の變化

散句と對句　詩には散句がある、對句がある、散句は文章で云ふ所の散文のやうな

ものである、前の絶句の例に示した南樓望の詩、從軍行の詩は、各句皆散句である、對句は字句が兩々相對してゐるものであつて、前の律詩の例に示したる山居即事の、寂寞と蒼茫の二句、鶴巢と人訪の二句、綠竹と紅蓮の二句のやうなのが對句である、對句も之を一句つゝに引き離せば、單獨の散句となるのである、故に詩の句法は、對句のことを詳にすれば、散句のことは自ら明かになる譯である、

詩の五言には自ら五言の句がある、七言は自ら七言の句がある、五言に二字を足成して七言となし、七言の句の二字を削去して五言となし得るやうな句では、未だ以て句の至れるものとは云はれぬ、詩は句法巧絶なれば、通篇偉麗の觀を爲し、句法にして精絶なれば、全篇飛動の勢あるものである、詩を作らんものは、古人の句を讀破參玩して、句法の變化を悟るがよい、

句讀なしの句法　句には、五言ならば五字、七言ならば七字、句讀なしに讀み下だして、一句を成しゐるものがある、之を五字一句法、七字一句法と呼んでゐる、

例へば不必問君平とか、佳句法如何とかの句は、五字を以て一句を成してゐる、欲笑周文歌燕鎬とか、不覩聲名與人物とかのやうな句は、七言を以て一句を成してゐるものである、

連串したる句法　詩句には又二句三句連串し、之を一氣に讀み下だして一句と見るべきものもある、例へは又從江北路、重到竹西亭とか、若無三日雨、那得一年秋の句のやうなのは、二句を以て一句の觀を成してゐるものである、越王勾踐破吳歸、義士還家盡錦衣、宮女如花滿春殿、只今惟有鴛鴦飛の如きは、上の三句が連串してゐるから、之を一氣に讀み下だして一句の觀をなすものである、即ち第三句までは越王の盛事を叙したもので、第四句が現下に見る所の有樣を述べて懷古の情を寫してゐるのである、

問答の句法　一句の中に問と答との詞を用うるものがある、即ち丈夫何在西擊湖は、丈夫何在の四字は問にして、西擊湖の三字は答である、又一句は問、一句は答の句法もある、即ち松下問童子、言師采藥去の如きは、松下の句は問で、言師の句は答である、更に又前二句が問にして、後二句が答のものもある、瀟湘何事等閑回、水碧沙明兩岸苔、二十五絃彈夜月、不勝淸怨却飛來の絕句は、上二句は問であつて、下二句が答である、此等の句法を呼んで問答句法と云つてゐる、要するに詩の句法は決して易々たるものでない、

2、對句法

對句の句法　古人が對句の句法を論じたるもの一樣でない、天地と日月と對するのは正名對、花葉と草芽とは同類對、蕭蕭と赫赫とは連珠對、黃槐と綠柳とは雙聲對、彷徨と放曠とは疊韻對、春巒と秋池とは雙擬對など云つてある、詩苑類格に載する所の八對といふのは、左の如くである、

的名對　送酒東南去、迎琴西北來の如し、

異類對　風纖池閣塹、蟲蛩草土牧の如し、

雙聲對　秋露香二佳菊一、春風覆二驅蘭一の如し、
疊韻對　放蕩千般意、遷延一人心の如し、
連綿對　淺河若レ帶、初月如レ眉の如し、
雙擬對　議レ月肩欺レ月、論レ花頰勝レ花の如し、
廻文對　悼新因レ意得、意得爲レ情新の如し、
隔句對　相思復相思、夜夜淚沾レ衣、空嘆復空嘆、朝朝君未レ歸の如し、

次に又詩法纂論に述ぶる所の、五言、七言今體の對句法は左の如くである、

五言近體の句法として擧げたるもの、

流水對　江流天地外、山色有無中、
分裝對　屢將二心上事一、相對夢中論、
反裝對　好武事論レ命、封侯不レ許レ年、
走馬對　野老來看レ客、河魚不レ用レ錢、
折腰對　不レ寢聽二金鑰一、因レ風想二玉珂一、
層折對　遠水象レ天湧、孤城隱レ霧深、
背面對　暴レ藥能無レ婦、應レ門自有レ兒、

七言今體の句法として擧げたるもの、

折腰對　不レ貪夜識二舍銀氣一、遠レ害朝看二麋鹿遊一、
三折對　風色天高猿嘯哀、水清沙白鳥飛還、
倒裝對　紅稻啄餘鸚鵡粒、碧梧棲老鳳凰枝、
分裝對　旌旗日暖龍蛇動、宮殿風微燕雀高、
流水對　己知白髮非二春事一、且盡芳樽二戀二物華一、
走馬對　晝漏稀レ聞高閣報、天顏有レ喜近臣知、
錯綜對　楊花細逐二桃花一落、黃鳥時象二白鳥一飛、
句中對　孤雲獨鳥川光動、萬井千山海色秋、

就句對　白首丹心依二紫禁一　一鹿伍部淨二三邊一

尙他に對句の句法を論じたるもの多くあれども、玆には略して載せない、更に煉句の法について述べやうと思ふ、

雙對句法　これは一句の中に對するものを云ふのである、小院廻廊春寂々、浴鳧飛鷺晚悠々のやふに、小院と廻廊とは對し、浴鳧と飛鷺とは對し、且二句が全然對してゐるやうなのである、

上三下四句法　これは一句の上三字と下四字とで句を成してゐるものを云ふのである、即ち漁人網集二寒潭下一　估客舟隨二返照來一の如き句法がソレである、漁人網、估客舟、の各上三字と集二寒潭下一　隨二返照來一の各下四字を以て各七字の句を成し、ソレが二句共に對してゐる、これは五言の句なれば、上三下二句法にあたる、即ち夜郎溪日暖、白帝城風寒の如きがソレである、

上四下三句法　それは一句が上四字、下三字を以て句を成し、上下別々の事を云ひ合せて一句が出來てゐる、金馬朝回門似水、碧鷄天遠路如絲のやうな句を云ふのである、七言の句には、此句法が最も多い、五言の句ならば、上四下一の句法にあたるのである、即ち風遶二西極一動、月過二北庭一寒の如きがソレである、

上應下呼句法　これは上の四字を下の三字で解く句を云ふのである、素練抹レ林雲氣薄、明珠穿レ草露華新の句は、素練か林を抹してゐるのは、雲氣の薄いのである、明珠が草を穿つやうに見ゆるのは、露華の新しいのであると、下の三字を以て上の四字を說明してゐる、

上呼下應句法　この句法は前項の句法と反對であつて、上四字を以て呼びかけ、下三字が之に應ずるものを云ふのである、林花着レ雨應脂落、水行奉レ風翠帶長の如く、林花雨を着けて、それが應脂の落つるやうである、水行風に奉かれてゐるのは、翠帶のやうに長いと應じてゐるやうな句法のことである、

行雲流水句法　この句法は二句を一と續きに言ひ下だして、分けて見えないやう

にする句法である、春日鶯啼修竹裡、仙家犬吠白雲中などのやうな句がソレである、又、欲下爲二聖朝一除中弊事上肯將二衰朽一惜二殘年一の句も、行雲流水句法である、此句法も古人の作に多く見る所である、

顚倒錯綜句法　この句法は字を分けて句の上下に置き、殊更に錯綜させて句を成すのを云ふのである、紅稻啄餘鸚鵡粒、碧梧棲老鳳凰枝とあるは、鸚鵡啄餘紅稻粒、鳳凰棲老碧梧枝とするが尋常の句であるのを、斯く顚倒錯綜させたのである、舞レ鑑鸞窺レ沼、行レ天馬度レ橋とあるのも、林下聽レ經秋苑鹿、江邊捲レ葉夕陽僧などの句も、皆此句法である、此等弄巧の句法は古人に頗る多い、

上二下五句法　この句法は上二字下五字を以て句を成してゐるものを云ふのである、朝罷香煙携滿レ袖、詩成珠玉在レ揮レ毫とか、世乱闘々久爲レ客、路難悠々長傍レ人などの句法がソレである、これは五言の句ならば、上二下三字句法にあたる、即ち乘レ涼看二洗馬一、森木乱二鳴蟬一の如きがソレである、

上五下二句法　この句法は前項の句法の反對であつて、五更鼓角聲悲壯、三峽星河影動搖とか、永夜角聲悲自語、中天月色好誰看と云ふやうな句法を云ふのである、

上一下六句法　この句法は上一字下六字で句を成してゐるを云ふので、事如レ夢斷無二尋處一、人似二春歸挽不レ留とか、松浮欲レ盡不レ盡雲、江動將レ崩未レ崩石のやうな句を云ふのである、これは五言の句では、上一下四句法にあたる、即ち青惜二峰巒過一、黃知二橘柚來一の句がソレである、

象外句法　この句法は、物を擬らへ比ぶるに、意を以てして其物を明らさまに言はぬ句法である、聽レ雨寒更盡、開レ門落葉深の如きは、落葉を雨聲に比擬したのである、含レ風鴨綠鱗々起、弄レ日鵝黃裊々垂は、水柳を咏じた句であるが、此句は水柳の用を言つて、其名を言ひ形はさぬ所に妙味があるのである、煉句の法は大抵以上の如くであるが、更に煉句についての注意を述べやう、

3、煉句上の注意

句勢を強くせよ　詩に於ける句は、之を工みにせんと欲すれば、意足らずして勢が弱くなり易いものである、その意足りて句の強からんことは、古人も難しとしてゐる所である、初學者は、寧ろ句は少しく拙くとも、句勢の強いやうに作るがよい、

同意味の句を避けよ　絶句の四句の中、又律の對聯に同意の句を作らぬやうに注意するがよい、到ル江吳地盡、陽ル岸越山多などを讀む味ふべきである、又對句でないのに、對句のやうに見ゆるも惡い、對句は對せぬやうに見えて、ソレが對してゐるのがよいのである、杜甫の酒債尋常行處在、人生七十古來稀の類を味ふがよい、

偏枯を避けよ　對句を作るときに避くべきは偏枯と云ふことである、とこれは一句は十分に愼つてゐるが、他の一句がそれに副はぬのを云ふのである、古人の詩に歌するに、三杯軟語後と酒に醉ふことの修辭なる軟語の字面を用ひたから、一枕晴雷餘と對せしめた、黑甜は畫寢の俗語である、斯く對せしめたから偏枯を免れたのである、皮光業と云ふ人の句に、行人折ル柳和ニ輕絮一、飛燕啣ル泥帶ニ落花一の一聯を作つた、自らは之を傑句と信じてゐるし、人も亦之を許してゐたが、或人が泥には花が無いから、これを柳の絮に對するは偏枯であると評したと云ふことである、學者の味ふべき所であると思ふ、

合掌を避けよ　對句には又合掌と云ふことを忌む、合掌とは、字面は換れども味意の換らざるを云ふのである、對句の合掌は、敍句で云へば重複と云ふことになるから、作句上尤も注意するがよい、魚戲新荷動、鳥散餘花落とか、蟬噪林愈靜、鳥啼山更幽などの句は、造語は如何にも奇拔だけれども、動と落、靜と幽の如く、合掌の弊があるやうだ、王荆公は、鳥啼山更幽の句に對するに、風定花猶落とした、上句は動中に靜あり、下句は靜中に動があるやうだ、斯くて合掌の病を免れたと云ふべきである、

奇對と假對　凡對句を作らんには、對に用ふる字面が餘りに疎遠であるとその對が粗對になる、去りとて餘りに接近であるとその對か俗に流れる、即ち日と月とか、天と地とかを、句ごとに對しては妙味がない、對句の調子を能くせんとならば、奇對、假對などを用うるがよいのである、併しこれは大に手腕を要するものである、奇對と云ふのは、例へば見說騎レ鯨遊汗漫、亦曾捫レ虱話二辛酸一の對句のやうなもので、鯨を虱と對してゐる、これは大小甚だ異なるものを對せしめたので奇對と云ふのである、假對とは讀んで字の如く、的對ではなけれども、假りに用ひて對せしめるのである、假對は亦之を借韻とも云つてゐる、厨人具二鷄黍一稚子摘二楊梅一の對句の如きは、楊は羊に通じて鷄に對してゐるのである、根非レ生二下土一葉不レ墮二秋風一の對句にあつては、下は夏と同音なれば、之を秋に對せしめたのである、此等の假對は初學者は漫りに學ばぬがよい、

4、承襲と剽用

剽竊を忌む　煉句の法は已に述べた如くであるが、後人が詩を作るには、勢古人に依倣せねばならぬ、然らずして惟已れを師として自ら作るときは、蕪漫雜駁に陷り、遂に見るに足るやうなものは少ないことになる、されば今人が古人の詩意を偸み、詩勢を偸むと云ふことは、已むを得ないことである、偸むと云へば語弊があるけれども、これは剽竊の意ではなく、承襲と云ふものであるから差支はない、古人は既に偸意、偸勢、偸語と云ふ三つを論じてあるが、此三偸の中でも、偸語は斷じて避けねばならぬ、偸語は之を鈍賊と云つてゐる、

偸意　詩意を偸むと云ふことは、例へば張公範が、蠟花亦是無情物、特向二人前一也淚流の句を作つたが、この句は唐詩の蠟燭有レ心還惜レ別、替レ人垂レ淚到二天明一の詩意から來たものである、范石湖の吹二開紅紫一還吹落、一種東風兩樣心は、唐詩の春風堪レ賞還堪レ惜、纔見二開花一又落花と云ふ句より來たものである、又元人の詩に如何十二金人外、猶有二民間鐵未一レ銷の句がある、然るに清人の陳恭尹なる人は、博

淺の鐵槌に代よるに圯上の書を以てして、夜半橋邊呼二孺子一 人間猶有二未レ燒書一とやつた、此等は剽竊では無い、詩意を承襲したと云よものであるから味よべきである、

偸勢　黃魯直の詩に、野水自添二田水一滿 晴鳩却喚二雨鳩一來と云よ句がある、これは梅聖俞の南隣鳥過二北隣一叫、高田水入二低田一流の句勢より出で來れるもので承襲である、

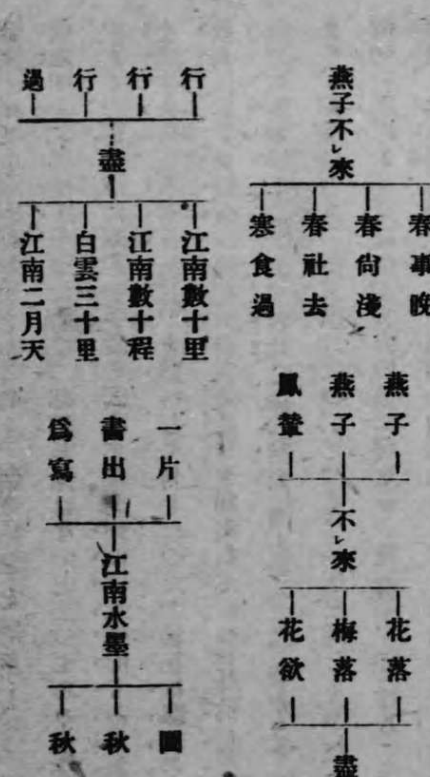
偸語　偸語と云ふことは、例へば杜少陵の詩に文章千古事とか、乾坤一腐儒とか寒花只暫香とあるのを、陳無巳が文章平日事、乾坤着二腐儒一、寒花只自香としたなどは、剽竊の所が見える、剽竊は何處までも忌むべきである、

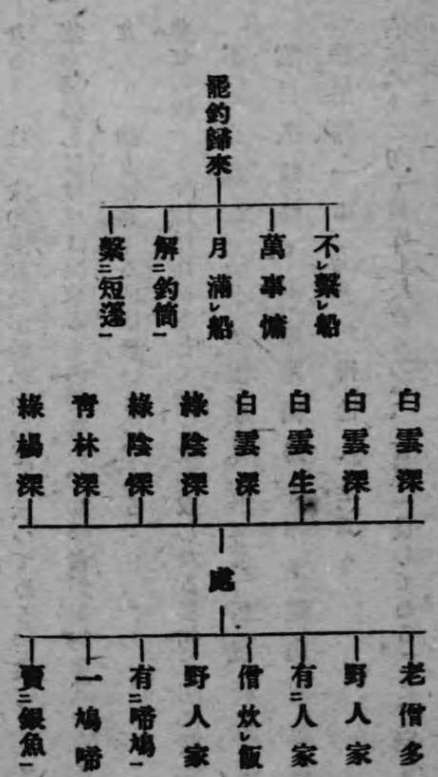
詩句の翻用　古人の意を以て其語を翻べし、古人の意を以て其語を新にするのは詩を作るものゝ活手段である、されば宜しく嶄新に奇警に之を翻用し、それが鄙俗に陷らぬやうにするがよいのである、古人の論ずる所によれば、杜甫が明年此會知誰健、醉把二茱萸一仔細看とある句を、劉俊は之を翻用して、不レ用茱萸仔細看、管取明年都强健とやつたのは、鄙俗を免れないと云つてゐる、亦知り置くべきである、更に茲に翻案の手段を云はんに、神仙は美稱のものである、然るに古人は丈夫生命薄 不幸作二神仙一と翻へして句を作つた、楊花は風雪の物である、古人は我比二楊花一更飄蕩、楊花只有二一春忙一と翻案して作つた、白雲は閒物である、古人は、白雲朝出二天際一去、若比二老僧一猶未レ閒とやつた、斯やうなのが翻案の妙處とある、翻案は古人の語又は詩について、更に一層を進むるものである、

詩句の明取　又詩は、古人の一二句をその儘襲用して作ることもある、水田飛白鷺一 夏木囀二黃鸝一とは李嘉祐の句であるが、王摩詰はこの五言に、漠々、陰々の二字を足成して、漠々水田飛二白鷺一 陰々夏木囀二黃鸝一としたが、却つて詩句に生動の勢があるやうに思はる、、李白の詩に、解道澄江淨如レ練、令二人憶儘二謝玄暉一と云よがある、この詩の澄江淨如レ練の五字は、謝玄暉の句を全用したのである、

此の如きは取明と云つて、剽竊とは云はない、

類句のこと　古人の詩句を見るに、往々相類するものがある、必ずしも剽竊ではない、





今人詩句を作るに、古人の詩句に出入することは、勢已むを得ない所であるが、時合は別として、飜訳補綴を事とするやうなことは詩人としては爲すべきことでない、何處までも風流の趣味を失はぬやうにせねばならぬ、

5、集句

集句と云ふこと　詩を作るに、一句も自家の句を着けないで古人の成句ばかりを集めて、一篇の詩を成すことがある、之を集句と云つてゐる、陶淵明の句のみを集めたのを陶集と云ひ、杜子美の句のみを集めたときは杜集と云ふ、或は唯唐人の詩とか、宋人の詩とか、同時代の人の句を彼此一句つゞ集めて作るのもある、此集句なるものは、宋の王荆公が始めたのだと云つてゐる、集句を作さんには、多くの詩集を讀破しなければ出來るものでない、初學者が集句を試むることは困難なるのみならず、餘りに益する所は無いものである、

集句の例　今茲に作例として僧元政の成したる集句を左に錄せん、

不レ說有爲法　王貞白　永懷二塵外躅一　孟浩然　鳥窺新罅粟　包佶
雲白久晴峰　曹松　遠路獨歸レ寺　周賀　深山何處鐘　王維
悠悠無二一事一　杜荀鶴　何得二世人逢一賈島

右は八人の句を集成したるもので、首尾一貫してゐること、宛も自家の手に成つたやうに見られる所に手腕があるのである、

6、聯句

栢梁體聯句　聯句の祖と呼はれてあるのは、漢武帝が催された栢梁體聯句である、帝曾て栢梁臺を作り、群臣に坐を命じて、人毎に七言一句を賦して、各志を言はしめた、此詩を栢梁體と名けられてある、

聯句なるものは、毎句に韻を押し、一人一句のものとしてある、聯句は各志を言ふものであるから、一句に一意あり、必ずしも前後の句に聯續してはゐない、又句も重複に渉ることもあるが、ソレは可成避けるやうになつた、

左に栢梁聯句を擧示せん、

日月星辰和二四時一　武帝　驂駕駟馬從レ梁來　梁王
軍國士馬羽林材　大司馬霍去病　總二領天下一誠難レ治　丞相石慶
和二撫四夷一不レ易哉　大將軍衛青　刀筆之吏臣執レ之　御史大夫倪寛

撞レ鐘伐レ鼓聲中レ詩　太常周建德　宗室廣大日登滋　樂正劉安國
周衛交レ戰禁二不時一　衛尉路博德　總二領從宗一栢梁臺　光祿勳徐自爲
平理清獄決二嫌疑一　廷尉杜周　修二飾輿馬一待二鑾幸一　太僕公孫賀
郡國吏功差二次之一　大鴻臚壺充國　乘輿御物主二治之一　少府王溫舒
陳粟萬石揚以箕　大司農張成　徹道官下隨討治　執金吾中尉豹
三輔盜賊天下危　左馮翊盛宣　盜阻二南山一爲二民災一　右扶風李成信
外家公主不レ可レ治　京兆尹　樹房率更領二其材一　詹事陳掌
蠻夷朝賀常舍其典　屬國　柱析樽櫨相支持　大匠
枇杷橘栗桃李梅　大官令　走レ狗逐レ兎張二罘罻一　上林令
置二妃女居一甘如レ飴　郭舍人　迫窘詰屈鄰窮蹙　東方朔

此句を見れば、各自の意向志操は、自ら七字の中に露はれて、千秋の下、猶其人の精神を窺ふに足るではないか、起句の日月星辰の一句は、和するもの及ばず、武帝の意氣が宇宙を籠蓋する氣象を見るべしであらう、其餘、丞相は丞相の口吻があり、武將は武將の口吻があり、執政の官、協律の司、近衛の尉、警察の吏、郡國の守、京兆の尹、各其掌る所の職について、直に胸憶を君主の前に吐露して、少しも憚る所がない、末句の東方朔に至つては、語甚だ戲慢のやうであるが、亦其人の身分である、蓋東方朔は聯句の最後に居り、殆ど語を下だす所が無く、甚だ窮窘したるの意を以て結と成したので、却つて面白い所である、

△△△△△△△△
栢梁詩は七言詩の權輿　右に述ぶる所の栢梁聯句は、實に七言句の權輿にして、又七言古詩の濫觴であることは、何人も異議を挾まぬ所である、尤も詩經や離騷の中にも、七言を以て句を成したものがあるけれども、通篇七字で句を成してゐるのは、即ち此栢梁詩を以て始めとしてある、

第五字法

1、字は詩句の元素

實字と虛字　字には實字がある、虛字がある、山川草木日月風雨などの實形あるものは實字である、去來多少焉哉也乎のやうに、實形の存せざるものは虛字である、詩作には實字も虛字も一方に偏することなく、適當に安排すべきである、且字は詩句の元素をなすものなれば、元素たる字の使用が拙劣であれば、妙句佳作を見ることは出來ない、況んや絶句の如きは、僅々二十字か二十八字を以て、題意を發揮するものであれば、一字たりとも無駄に使ふことを避け、能く働かしむやうにせねばならぬ、

眼字即ち詩眼のこと　詩句には眼字卽ち句中眼と云ふがある、此眼字たるべき字は、百錬千鍛して使はねばならぬ、古人の夏日對雨の詩に、

對面雷驚樹、當窗增雨趁人、

と云ふ詩があるが、此句中の驚字、趁字は眼字であつて、此字によつて夏雨の快を見ることが出來るので、大切な字面である、

寒花飄客淚、邊柳掛鄉愁、

の句は、飄字、掛字が眼字である、

寒日滿川分衆色、暮林無葉寄秋聲、

の句にあつては、分字と寄字が眼字で、皆錬鍛した跡が見えるではないか、

五言と七言の眼字　凡詩句中の眼字は、五言は第三字を詩眼となし、七言は第五字を詩眼となしてある、その詩眼に實字を用ふれば、句が勁健となるものである、之を實眼と云つてゐる、

殘暑蟬催盡、新秋雁帶來、

朝登劍閣雲隨馬、夜渡巴江雨洗兵、

などの句は、蟬字、雁字、雲字、雨字皆實字にして、句々健勁なるを覺ゆ、

又詩眼に虛字を用ふるものは、

白沙留二月色一　綠竹助二秋聲一

返照入レ江翻二石壁一　歸雲擁レ樹失二山村一

の句の如きは、詩眼たる留字、助字、翻字、失字が警字である、之を虛眼と云つてゐる、

每句煉字の必要　詩句中の字を吟味することは、唯詩眼の字ばかりではない、五言ならば第一字より第五字まで、七言ならば第一字より第七字まで、虛字も實字も煉らねばならぬことは勿論である、卽ち

經レ心石鏡月、到レ面雪山風、

夢レ楊楊花鋪二白氈一　點レ露青蓮墨二青錢一

これは首字を煉らねばならぬのである、

紅入二桃花一嫩、青歸二柳葉一新、

花迎二劍佩一星初落、柳拂二旌旗一露未レ乾、

これは第二字を煉らねばならぬのである、

紺園澄二夕霽一　碧殿下二秋陰一

風袂挽レ香難二澹蕩一　月窓橫レ影已精神、

これ第三字を煉らねばならぬのである、

四面花爲レ壁、三更水不レ波、

東郭風喧三鼓市、西城石淘二江濤、

これ第四字を煉らねばならぬのである、

柳塘春水漫、花塢夕陽遲、

これ第五字を煉らねばならぬのである、

武帝祠前雲欲レ散、仙人掌上雨初晴、

これ第六字を煉らねばならぬのである、

綠草自隨二香輦一去、叢花應下待二御筵一開上

これ第七字を錬らねばならぬのである、

錬字についての例話　錬字と云ふことは、必ずしも難解の字面を求むるの謂ひではない、それにつき逸話がある、昔蘇東坡と其妹及び黄山谷の三人相會したるとき、和風、細腰、澹月、梅花の語に、字眼を入れて、五言二句を作ることを約したことがあつた、此時蘇東坡は、

和風搖二細柳一、澹月映二梅花一

とやつた、黄山谷は、

和風舞二細柳一、澹月隱二梅花一

とやつた、その時妹氏は、それでは面白くないと云つて、

和風扶二細柳一、澹月失二梅花一

とやつたので、東坡も山谷も嘆賞したと云ふことである、扶、失の二字は、實に人意の表に出でゝ、奇驚絶倫、他の二人の及ぶ所でない、これを見ても詩眼の字面を錬らねばならぬことが分かるであらう、實に句中眼は、一字を點して神理俱に出づるものがある、國破山河在、城春草木深の如く、在字、深字によつて興廢の悲びべきを感せられる、又一字を用ひて景物眞に逼るものがある、兩行秦樹直、萬點蜀山尖の直字、尖字は如何にも秦樹と蜀山の特色を現はしてゐる、山河扶二繡戸一乾坤繞二漢宮一の如きは、扶字、繞字を用ひて、繡戸の高きと、漢宮の大なるとの反襯意を現はしてゐるものである、以上說く所によつて大體にも詩眼のことを悟るがよい、

2、拆字と倒用文字

拆字のこと　句を作くるに拆字を用うることがある、拆字とは二字乃至三字連綿してゐる字面を拆開して、之を句中に配置することを云ふのである、

春酒杯濃琥珀薄、氷漿椀碧瑪瑙寒

の句は、杜甫が鄭駙馬の宅に宴したる時の作であるが、琥珀杯、瑪瑙椀は主家の器

物の立派なるを言つたのである、若し此字面を其儘に使用したならば俗たるを免れない、ソコで杯椀の二字を倒拈して上に置き、濃薄、碧寒の字面を、互に照映せしめた所が妙を得たのである、此等は陳腐を化して新奇と爲すの手段である、

拆字の例　今茲に拆字の作例を示さんに、杜甫が宿白沙驛の詩に、

驛邊沙舊白、湖外草新青、

とやつたのを見よ、白沙は驛名で、青草は湖名であるのだ、今之を拆開して韻に協はしめた、而かも其名稱が倒拈してある、此拆字によつて、句の平板卑弱に陷らんとするを免れ、巧みに振起一番して、突兀勁健なるを得たのである、又彼の有名なる王昌齡の、秦時明月漢時關の詩も、拆字の工を弄したものである、これは秦漢以來明月關と云ふが匈奴の境に置かれてあつたが、此關の名を拆開して秦時明月漢時關とやつたのである、以て作詩家は拆字の妙趣を悟るがよい、

倒用文字のこと　詩句に倒字を用ふることは、曾に其句を勁健ならしむるばかりではない、韻脚に協はしむる爲にも、之を用ふることが多い、但連綿字は、之を上下に顛倒して害なきもの丶外は、妄意に倒用しては不可である、陸放翁の詩に、

不寐起中夕　披衣增慨慷

と、慷慨を倒用してある、蘇東坡の詩に、

興廢何足吊、萬世一仰俯

と、俯仰を倒用してある、釋皎然は其詩に、

向晚薄雲催雷雨　清寒無奈襲裳衣

とやつて、衣裳の字を倒用した、其他悽慘を慘悽、綢繆を繆綢、琴瑟を瑟琴、參商を商參とするなどは、皆韻に協はしむる爲で、古人も多く之を使用してゐる、

倒用文字の例　左に韓文公が用ひたる倒字を參考として列記せん、

元凱承華勛　所學皆孔周、閭里多死飢、下言引龍夔　憂戰侑牢牲　百金交弟兄　慇懃謝友朋　薄厚胡不均、身體豈專康、超然謝朋類　碧海滴瓊玲、調

和進二梅鹽一 渚牙相緯經、詩書畫二後先一 約不レ論二財貲一 無二人角二雄雌一、鹽對多二差參、此格輪崛欲、寒飢出無レ鹽、盤蔬冬春雜、不レ見酬二稗稊一 磨淬出二角圭一 惟學平二貴富一 坐令二四海如二虞唐一 嗣皇繼聖登二夔皐、後日縣知慚二莽鹵一 杏花兩株能白紅、百片颺泊隨二西東一 兩鬢雪白趨二埃塵一 推レ書撲レ筆歌慨慷、

など、多く倒字を使用してあるのを見る、玲瓏を瓏玲、鹽梅を鹽梅、參差を差參、圭角を角圭、唐虞を虞唐とするなどは、隨分思ひ切つた遣り方である、

3、疊字と雙字

疊字のこと　九月九日望鄉臺、他鄉他席送レ客杯の句は、九の字と他の字が二回用ひてある、三月正當三十日の句は、三の字が二回出てゐる、山上有レ山歸不レ得の句も山の字が二回用ひてある、此の樣に同字を下だすのを疊字と云つて、作詩上忌まない、併し漫然と一首の詩句中に、同一の字を重出してゐることは惡い、宋人杜常の詩に、

行盡江南數十程、曉風殘月入二華清一 朝元閣上西風急、都入二長楊一作二雨聲一

の作がある、入字風字が重出してゐるけれども、これは千古の佳作である、但同字を重出しても、意義が異なれば、忌まぬことになつてゐる、又古詩になると、同字を重出することは、少しも忌まないのである、

雙字のこと　同字を二字疊下して、漠漠とか沈沈とか漂漂とかのやうに用ゐる類は、之を跳り字、又は雙字と云つて、前に述べた疊字とは趣を異にしてゐる、此雙字を用ゐることは、決して容易でない、大に手腕を要するものである、殊に絶句の上二句の中に、跳り字を用ゐることは、比較的易けれども、下二句の中に用ゐることは、尤も難しとしてゐるから、其塲合には百錬千鍛を要するものである、

納納乾坤大、行行郡國遙、

の如きは、納納の字面でなければ、乾坤の大なるを見るに足らぬ、行行の二字を用ひなければ、郡國の遙なるを見るに足らぬのである、李嘉祐の詩に、水田飛二白鷺一

夏木囀黃鸝の句がある、王維は此句に雙字を添加して、

漠漠水田飛白鷺　陰陰夏木囀黃鸝

としたれば、甚だ玄妙の句となつた、雙字の使用は此の如くにして功あるものなれば、工夫に意を致さねばならぬ、

雙字の例　左に雙字の古句二三を摘記せん、

滿滿長江去、冥冥細雨來、

野徑荒荒白、春流泯泯清、

江煙輕冉冉、竹日淨暉暉、

短短蒲茸齊似剪、平平沙石淨於篩

遠樹依依如送客、平田渺渺獨傷春、

尋花胡蝶深深見、點水蜻蜓款款飛、

野廟向江春寂寂、古碑無字草芊芊、

一、雙聲と疊韻

雙聲のこと　雙聲と云ふことは、音韻學上の區別であるが、之を簡易に言へば、二字を組合せて熟語とするに、其語を組合する音の首位にある字音を同じてしてゐるも、其字の韻が異なつてゐる場合を云ふのである、例へば玄謹の二字は雙聲である、卽ちゲン、ゴのゲとゴは共にガ行に屬して同じであるけれども、玄は先韻で、謹は遇韻であるから、韻を異にしてゐる、斯やうなのを雙聲と云ふのである、李群玉の詩に、方穿詰曲崎嶇路の句のやうに、詰曲、崎嶇の字面は何れも雙聲である、卽ちキツ、キヨク、及びキ、クは字音の首位にある音が、皆ガ行に屬すれども、詰は質韻、曲は沃韻、崎は支韻、嶇は虞韻で、韻の所屬を異にしてゐる、

疊韻のこと　疊韻と云ふことも、音韻學上の言葉である、例へば二字の熟語にして二字とも同韻なるを云ふのである、璆琳、聲名などはソレである、李群玉の詩に、又聽鉤輈格磔聲の句のやうに、鉤輈、格磔は疊韻である、卽ち鉤輈は共に尤

韻、格律は共に陌韻であるからである、

雙聲疊韻の例のこと　雙聲、疊韻は、唐代律詩の盛なるに至つて、其法いよ〳〵密なるやうになつたのであるが、今杜甫の句について之を例すれば、

美名人不レ及、　佳句法如何、
乞レ歸優詔許、　遇レ我宿心親、
臨レ老稱孤極、　傷レ時會合疎、
所レ向無二空濶一、　真堪託二死生一

これは雙聲相對する句、

蹉跎暮容色、　悵望好林泉、
鳧樹行相引、　連山望急開、
聲名從此大、　汨沒一朝伸、

これは疊韻對する句、更に雙聲と疊韻と相對するものは、

影靜千官裏、　心蘇七校前、
感激時將晚、　蒼茫興有神、
綠竹半含籜、　新梢時出牆、

の句に於けるやうに、感激、新梢、心蘇は雙聲で、影靜、蒼茫、綠竹は疊韻である、繁枝容易紛紛落、嫩莖商量細細開は、雙聲と疊韻と相對するのみならず、更に紛紛、細細の疊字即ち跳り字を添へて聲調を整へてゐるので、皆細心工夫の餘に成れるものとせねばならぬ、

吃語詩　蘇東坡は吃語詩と名づけて、全篇悉くカキクケコの音即ち牙音の字面を用ひて詩を作つた、此等の詩は一あつて二あるべからざるものであるが、參考に左に之を示さん、

江干高居堅關扃、耕犍駑駕角掛レ經、孤航繫レ舸荒茫隔、筍鼓過軍雞狗驚、解襟
廣景合箕踞、擊劍高歌鷙鳥鷹、荆斧供レ膾愧攪碁一乾鍋更戛甘瓜羹、

誠に之を音讀せよ、口吃者の語るに似てゐる所が面白いではないか、

第六　語法

1、詩語

古今の詩語　語とは二字乃至三字四字を以て組成されたる言葉である、大概の詩語は、古人が既に使用してあるから、其詩語中より便宜採取して詩を作つて差支へはないが、併し古人の糟粕のみを舐れと云ふのではない、現代は日進の世であるから、古人ばかりを頼みとはしてゐられない、假令古人の使用せざる詩語にても、新奇にして怪僻に陷らざる限りは、種々の新熟語を作成するがよい、否斯やうに努めなければ、嶄新にして見るに足るやうな詩は出來ない、但漢字には同意義のものが澤山あるから、之を活用するにしても、能くその字の緩急輕重を考へて、それ〳〵の場合に適當するやうに、平穏にして字面の好きものを使用すべきである、俗卑なる文字、軟弱なる詩語などは何處までも避くるやうにするが肝要である、

詩語の截取　今人が詩を作るには、古人の使用したる詩語の中から、二字三字を截取するが常である、例へば古句に、春風春雨花經眼とあるを、杜甫は花經眼の三字を截取して、且看欲盡花經眼の一句を成した、白樂天の長恨歌に、梨花一枝春帶雨の句がある、蘇東坡は梨花枝雨の三字を截取して、要看梨花枝上雨とした、古人概ね然らざるはなし、韓退之は、古語の鶴立雞群を用ひて、軒鶴避羣群とやつた、向平婚嫁畢の故事を用ひて、如今便可了爾、何用畢婚嫁の句を作つたのは、舊事を新に翻へしたもので、詩語の用法を玩味すべき例である、

古人の詩語を截取するとしても、餘りに陳腐なる語は避けねばならぬ、林逋の詩に、暗香浮動とか、疎影横斜などの詩語があるが、此語をその儘用うることは、手腕が無いことを表示する譯になる、暗香、浮動、疎影、横斜などの字面を、梅の詩句中に點出するはよいけれども、四字連綴した儘使用しては面白くない、他の字と

組合せて新しく詩語を作るがよい、詩句の載取も決して容易のものでない、

慣用の詩語　詩人の慣用する詩語は、殆ど限りがないが、其中熟字の下に、破、殺、盡、得、來、着、起、取、却、道、與などの字あるものは、之を助字と云つて、意味は無いのである、

踏破、點ー、吹ー、嚼ー、照ー、滴ーなど、

忙殺、愁ー、憐ー、笑ー、醉ー、盡ーなど、

落盡、去ー、立ー、行ー、捲ー、散ー、占ーなど、

料得、引ー、看ー、知ー、怪ー、識ー、留ー、占ー、認ー、憶ー、贏ーなど、

看來、聽ー、怪ー、別ー、歸ー、夜ー、生ー、向ー、近ー、年ー、從ー、歸去ー

など、

進着、睡ー、想ー、憶ーなど、

想起、打ー、扶ー、樂ーなど、

看取、記ー、認ー、領ー、好ーなど、

抛却、間ー、忘ー、失ーなど、

解道、報ー、知ー、休ー、莫ーなど、

留與、分ー、付ー、說ーなど、

この外慣用の詩語について、其讀み習はしのあるもの二三を抄記し、初學者の便に供しやう、

莫は、さもあらばあれど讀み、從教、一他、任他、儘教も皆同じやうに讀んでよい、

生怕、生憎は、あなにくやと讀むのである、

聞說、見說は、きくならく、みるならくと讀む、

若爲は、いかんかと讀み、いかんぞ、いかなると云ふ意に用ふ、この若爲は、安得、爭得、何由などと同じ義である、

底是、底處は、底は何と同じくいづれと訓ずるにて、いづれか是、いづれの處と
讀むのである、
賸有、剩在は、あまるほどある、の意である、剩の字は賸と同じことである、又剩
を餘の字、殘の字のやうに用うることも多い、
爾也、昔焉、昔者、頃者の字は、也、焉、者は皆助字であるから、意味は無いも
のと考へて用うればよいのである、
只合、祇合は、合字をまさにと讀んで、更にべしと訓ずるのである、
作麼、作麼生は、句尾に用うることが多い、句頭に用うるのもある、いかんぞ、
いかんかと譯し讀んで意が通ずる、
無如は、いかんともすることなしと讀むので、無奈も同じ讀み方でよい、これは
如、奈の字の下に何の字を加へてあるものと見て讀むのである、
匹如、匹似は、彼れと此れと同等に、相同じ、相似たりと云ふ意である、

這如許、如許、許來、爾は、許の字をこのやうにと譯して見るのである、爾は許
の字と同じやうに用う、
怪生、生妬、生怯、生懼、生愁の熟字中、怪生は怪得、怪來と云ふと同じである、生妬、生怯、生懼、生愁は皆生憎、生怕の類と同じと思つてよい、
千萬、萬一は、俗語に千萬御世話など云ひ、尺牘に千萬自愛と云ふ意である、即ち千返も萬返もくりかへしと云ふ意である、

2、故事故典の用法

故事故典は詩の材料　詩家は故事を用ひ故典を使つて句を作らねばならぬ、故事故典を用ひない詩は、何んとなく輕浮平板に失して、意味も自ら淺いやうに感ずるものである、併しながら餘り多く故事故典を用うれば、詩の生氣を失却するやうになり易いから、ソコは注意すべき點である、
故事故典を適當に驅使して、自家の詩を成さんには、痕迹を留めないやうにすること

とを努めねばならぬ、古人がその事について論じてあるのは、詩家が故事を用うるは水中に鹽を着けるやうに痕迹を留めず、其水を飲んで、鹽味を知るやうでなければならぬと云つてある、杜甫の句に、男兒既介胄、長揖別上官とあるは、之を作讀すれば、故事を用ひてないやうに思はるれども、介胄之士不拜と云ふことを用ひたのである、婦人在軍中、兵氣愁不揚の句は、軍中豈有女子乎との語から出でたるにて、其語を隱してあるのである、董玉虬の留別の詩に、逐臣西北去、河水東南流とあるは、常語のやうなれども、此は魏の孝武帝西奔したるとき、此水東流、而朕西上と云はれし故典を用ひたのである、

故事故典を用うることの工なるは、流石に杜子美、謝靈運を推す、詩家は此二家の詩を讀んで、得る所あるがよい、但初學者は、多く故事故典を用ふることを避くべく、此等を用うるとしても、可成古人の使用し來れるものを取つて用うるがよい、

鮑鬼簿と云ふこと　故事を用うるに、古人の姓名を多く引き用うるものを點鬼簿

と云つてゐる、必ずしも不可と云ふ譯では無いが、餘り多く古人の姓名を點出するは好むことでない、黃山谷の詩に、

程嬰杵臼立孤難、伯夷叔齊食薇瘦、

の如きは、二句の中に四人までも人名を着けてあるが、併し此詩は古今の名句として稱せられてある、

算博士と云ふこと　詩句中に好んで多くの數字を排置するを、古人は之を算博士と云つてゐる、

秦地重關一百二、漢家離宮三十六、

などは、數字を排置してあるが、これ亦好句である、

廣輿記と云ふこと　地名を詩句中に多く點出するのを廣輿記と呼んでゐる、

峨眉山月半輪秋、影入平羌江水流、夜發清溪向三峽、思君不見下渝州

は、七言絕句中に五個の地名を着けてゐる、然るに夫れほどに煩はしく感じない所

に手腕を認むるのである、初學者はよく〳〵意を致して、點鬼簿、算博士、廣異記などの譏を招かぬやうにするがよい、

◎第七　絶句

1、絶句の體

絶句と云ふこと　五言、七言の絶句は、唐代に出來たものである、唐人は絶句を小律と呼んでゐる、この絶句なるものは、唐代に創作せられたる八句の律句を截絶して、四句の詩を形づくられたのであるから、絶句と名づけたのであると論ずるものも少くはないが、必ずしも然るものであると拘泥するにも及ばぬ、尤も唐以前に於ても、五言四句の詩、七言四句の詩はあつたけれども、此等は絶句とは云はないで、樂府と呼んでゐるのである、

起承轉結　絶句には起承轉結の四句がある、起句とは第一句のこと、承句とは第二句のこと、轉句とは第三句のこと、結句とは第四句のことである、起句は詩の題意について先づ言ひ起すのである、承句は起句を接受して筆を下だすのであるが、轉句は讀んで字の如く、起承二句に述べた意向を餘所に轉換して、別に地歩を占め、題意を結ばんとする途中の句であるから、最も工夫して着筆せねばならぬ、結句は直接には轉句を顧み、間接には全篇を顧みて詩意を結ぶのであるから、其句勢は強くして力あるやうに工夫せねばならぬ、

轉句は絶句の主眼　絶句の作り方は、大抵第三句を以て主眼とするものである、第三句は一篇の詩意を轉換する所であれば、其句の靈不靈は、直に其詩の巧拙に關するものである、即ち一詩上下の關鍵であれば、其轉換に力あるやうにせねばならぬ、轉句にして工夫に缺くる所あらば、結句も自然に佳句を得難く、折角の第一句第二句も破壞せられて、全篇支離散漫、詩意の何たるかを尋ぬべからざるやうになるものであるから、第三句は最も推敲を費やすべきである、それについて尙云ふべ

きことがある、即ち轉句は出來るだけ、起承の二句と相離るゝやうにするがよいのである、起承に似よりの句又は重複の意あるものは絶對にわるい、宋の蘇東坡が、望湖樓に登つた時の詩があるが、其時は滿湖の風雨勵げしき勢を成して凄まじかつたので、忽ち興を發して、黑雲翻レ墨未レ遮レ山、白雨跳レ珠亂入レ船と起承の二句をやつたが、第三句が出來ない中に、風雨は止み、一碧の湖光天のやうに霽れた、東坡忽然として悟り、卷レ地風來忽吹散と轉句を着け、望湖樓下水如レ天と結んだ、此詩の前二句は、陰雨慘憺の景色である、轉句に忽然吹散の句を挾んで、澄霽快濶の模樣を云つて、結句に力あらしめた所は、如何にも陰陽雨晴の變化開闔を示して、全篇活躍の趣がある、これは一條の假話と見るべきなれども、轉句の着想着筆が起承二句と相離るれば、離るゝ程警拔になるものであることが分かる、但離るゝと云つても、必ず起承の二句と相連接するだけの趣向を工夫して、結句の伏線となるやうに意を致さねばならぬのである、

絶句作法の示解　彼の賴山陽は、初學者に絶句の作法を示すのに、今樣を以て解いたと云ふことである、左に之を紹介しやう、即ち其今樣は、

これが起句で、絲屋の娘を先づ着筆したのである、

姉が十六妹が十四

これが承句で、絲屋の娘姉妹二人と其年齡とを云つて起句を承けた、

諸國諸大名は刀で斬る

こゝには起承二句に無關係の大名のことを云ひ出したのが轉句である、此大名のことを引合に出したのは、姉妹が目で人を殺す底の美人なるを云はんが爲に、斯く着筆して意を轉じたのである、

絲屋の娘は目で殺す

これが結句で、起承の二句を顧み、更に又轉句を顧み、目で殺すの四字を出して、

全篇を收束した、これに依つて絶句の作法を大體悟るがよい、

轉句の實接と虛接　宋人周弼は、唐三體詩を著して、轉句の著筆に實接と虛接とあることを論してゐる、今茲に之を說明せんに、其實接と云ふのは、第三句に實事を着けて前二句に接し、以て轉換を加ふるものである、實事とは露華鳳月等の景物について筆を着くるのを云ふのである、虛接とは、第三句に虛語を着けて前二句に接し、以て轉換を加ふるものである、虛語とは、悲歡興亡などの心事について筆を着くるのを云ふのである、左に其一二の例を示さん、

尤溪道中　韓偓

水自潺溪日自斜、盡無雞犬有鳴鴉、千村萬落如寒食、不見人烟空見華、

隋宮　鮑溶

柳塘烟起日西斜、竹浦風圓雁弄沙、煬帝春遊古城在、壞宮芳草滿人家、

韓偓の作は、尤溪道中の戰後荒寥たる晚景を寫したので、水はゆるやかに流れて、夕日は斜に、見る所に雞犬は無く、唯鳴鴉を聞くのみであるとと云ふのが起承である、轉句は千村萬落の人家盡き果てゝ眼前の淋びしい樣は寒食の節のやうであると意を轉じた、これが實接の作法である、

鮑溶の詩は、隋宮弔古の作である、煬帝は長安より揚州に至る所に、離宮四十餘所を置いたと云ふことである、此詩の起承には、揚州に在る柳塘竹浦の荒涼たる晚景を寫し出して、煬帝の春遊したる古城の景は眼に入れども、已に其人は無いと意を轉じたのが轉句、これ亦實接の作法である、

秋思　張籍

洛陽城裏見秋風、欲作家書意萬重、復恐忽忽說不盡、行人臨發又開封、

寫情　李益

水紋珍簟思悠悠、千里佳期一夕休、從此無心愛良夜、任他明月下西樓、

張籍の秋思は、作者が洛陽にゐた時の作で、起承は秋風に感じて歸思の切なるを叙

べてある、轉句には、家書を書かんにも心忙はしく、忽々として記き盡し兼ねる情が寫してある、即ち虛接である、行人が發するに臨んで、復開封して書き漏しは無いかと、歸思の切なる餘り、心も手も忙はしい樣を叙べて結んである、

李益の寫情は、亡姫を悼むの作で、起承二句に、物を見て妻を思ひ出し、佳期已に休したと、死別の意を叙べた、アヽ妻に別かれてからは、最早良夜を愛するの心も失せて仕舞つたと、意を轉じたのが轉句、明月が勝手に西樓を照らしてゐるに任かせると結んだのが結句である、これ亦虛接の作法である、

2、絶句の平仄式

平仄圖譜　詩を作らんには、先づ平仄を如何に攝梅し、如何に排列すべきかを知らねばならぬ、平仄法には一定の式がある、玆に平仄式を說かんとするに、便宜のために、平聲は○、仄聲は△を以て標示し、平仄何れにても宜しき標示としては□の印を以て其圖譜を示さん、

五言絶平仄式

仄　起

起△△○○△
承○○△△○韻
轉△○○△△
結○△△○○韻

右は第一句の二字目に仄字を排列する式で、此の如きを仄起格と云つて、五言絶句の正格としてある、又次に示すやうに、第一句の二字目が平字なるのを、平起格と云つて、五言絶句の變格としてある

平　起

起△○○△△
承○△△○○韻

轉△△○○△
結○○△△○韻

以上の二式は、極めて森嚴なるものであるが、實際は此のやうに窮屈なる式を踏んで詩を作らぬ、多少の融通が出來るやうになつてゐる、

仄　起

起□△□○△
承□○□△○韻
轉□○○△△—又□○△○△としてもよい、
結□△△○○韻

平　起

起□○○△△—又○○△○△としてもよい、
承□△△○○韻
轉□△□○△
結□○□△○韻

五言絶句は、第一句に韻を押さないのが、常則である、又第二字の孤平を忌む、若し第一句に押韻することのある場合には、仄起の第一句は、□△△○○とすべく、平起の第一句は、□○△△○とするのである、又五言絶句に仄韻を用うるときの式は、左の通りである、

仄　起

起□△△○○
承□○○△△韻—又□○△○△としてもよい、
轉□○□△○
結□△□○△韻

平　起

起□○□△○
承□△□○△韻
轉□△△○○
結□○○△△韻—又□○△○△としてもよい、

右の式に於て、第一句にも押韻する場合には、仄起に在つては、□△□○△とすべく、平起に在つては、□○○△△とするのである、

失粘格　以上の外に失粘格又拗體とも云ふものがある、夫れは仄起の前二句と、平起の後二句とを組合せたるもの、又其反對に、平起の前二句と、仄起の後二句とを組合せたるもので、固より變格であるから、初學者は好んで學ぶべきでないが、心得置くべきである、

七言絶句平仄式

平　起

起△○○△△○○韻
承△△○○△△○韻
轉○△△○○△△
結△○○△△○○韻

仄　起

起△△○○△△○韻
承△○○△△○○韻
轉○○△△○○△
結△△○○△△○韻

右は七言絶句平仄式の森嚴なるものである、但七言絶句は、平起を正格とし、仄起を變格としてあること、五言絶句とは反對である、次に多少の融通を許してある平仄式を示さんに、

平　起

起□○□△△○○韻

承□△□○□△○韻

轉□△□○○△△—又□△□○△○△としてもよい、

結□○□△△○○韻

仄　起

起□△□○□△○韻

承□○□△△○○韻

轉□○□△□○△

結□△□○□△○韻

失衡格　七言絶句は、第一句に押韻するのが正式である、稀には失衡格とて押韻しない作もある、之を踏落しと名づけてある、初學者は好んで學ばぬがよい、若し

踏落しとするときは、平起の第一句は、□○□△△○○とすべく、仄起は、□△□○○△△とするのである、

次に又七言絶句に仄韻を用うるときの平仄式は左の如くである、

平　起

起□○□△□○△韻

承□△□○○△△韻—又□△□○△○△としてもよい、

轉□△□○□△○

結□○□△□○△韻

仄　起

起□△□○○△△韻—又□△□○△○△としてもよい、

承□○□△□○△韻

轉□○□△△○○

結□△□○○△△韻―又□△□○△○△としてもよい、

側體と失粘格。　七言絶句は平韻で作るべきが通例にして、其仄韻を用うるのは、之を側體と稱してゐる、側體は已に變體であるから、古人も強ひて平仄を詮議しなかつたやうである、

七言絶句にも亦失粘格があるが、唯奇句を得たる時などに、稀に用うるものである、初學者の學ぶべきではない、

仄韻を用うる場合にも、第一句を踏落しとすることがある、其時には、平起では□○□△△○○とすべく、仄起では□△□○○△○とするのである、

平仄式を諳んずる法　七言絶句の平仄式を諳んずるに、二四不同、二六對、一三五不論、二四六分明など云ふことがあるから、初學者は記憶して置くがよい、二四不同とは、毎句第二字と第四字とは、平仄必ず不同なるべきを云ふので、第二字目が平ならば、第四字目は仄、第二字目が仄ならば、第四字目は平なるべきを云ふのである、二六對と云ふのは、第二字と第六字とは、平仄何れにしても必ず對すべきことを云ふのである、一三五不論と云ふのは、第一字第三字第五字は、平仄何れを融通しても論ずる限りでないと云ふことである、二四六分明とは、第二字第四字第六字は平仄を變換して融通することを許さず、平の式ならば平、仄の式ならば仄と明かに踏むべしとの義で、即ち式通りにせよとのことである、

孤平と孤仄のこと　平仄式の融通をするについても、七言絶句に於ては、時に或は△△△○△△○と云ふやうに、第四字が平となることが出來する、之を孤平と云つて絶對に宜しくない、此の時は、第三字を平とするか、第五字を平とするかして拯はねばならぬ、尤も第二字と第六字の孤平となること、又孤仄となることは少しも咎めない、

3、絶句の格

叠散格　この格は四句ともに散句を以て篇を成し、決して偶對を用ひないものを

云ふのである、而かも此格は絶句の正式とすべきもので、古人の詩も十中八九は、全散格であるから、初學者は先づ此格より入るがよい、

春眠不レ覺レ曉、處處聞二啼鳥一　夜來風雨聲、花落知多少、

綠樹重陰蓋二四隣一　青苔日厚自無レ塵、科頭箕踞長松下、白眼看他世上人、

の如きは全散格である、

全對格　起句と承句とが對し、轉句と結句とも對する格を云ふのである、即ち

白日依レ山盡、黃河入レ海流、欲レ窮千里目一　更上一層樓、

兩個黃鸝鳴二翠柳一　一雙白鷺上二青天一　窓含西嶺千秋雪、門泊東吳萬里船、

の如きが全對格である、

前對後散格　この格は起句と承句とが對し、轉結の二句對しないものである、即ち

冷艶全欺レ雪、餘香乍入レ夜、春風且莫レ定、吹向二玉階一飛、

一年始有二一年春一　百年曾無二百歲人一　能向二花前一幾回醉、十千沽レ酒莫レ辭レ貧、

の如きが前對後散格である、

前散後對格　これは起句と承句とは散句にして對せず、轉結の二句が對するものである、即ち

終南陰嶺秀、積雪浮雲端、林表明二霽色一　城中增二暮寒一

出關愁暮一沾レ裳、滿野蓬生古戰場、孤村樹色昏二殘雨一　遠寺鐘聲帶二夕陽一

の如きが前散後對格である、

扇對と間對格　以上述べたる四格の外にも、扇對格、間對格などがある、即ち

昔時花下留連飲、暖日夭桃驚亂飛、今日江邊容易別、冷烟衰草馬頻嘶、

は扇對格で、起句と轉句と對し、承句と結句とが對してゐるから云ふのである、

越王勾踐破レ吳歸、義士還レ家盡錦衣、宮女如レ花滿二春殿一　只今惟有二鷓鴣飛一

は間對格で、承句と轉句とが對して、起句と結句が對して居ないものである、要する

に絶句は全散格の外は、寧ろ散格と見てもよい、

七、韻脚

韻脚と韻字　凡詩は句の脚に韻を押すものである、但絶句の轉句は此限りでない、韻脚と云ふことは、人の脚に喩へたるにて、若し人の脚にして跛があらば、完全の人とは言ひ難い道理であらう、詩も亦其韻脚の字に、陳腐なる韻字、浮薄なる韻字、險難なる韻字、過重なる韻字を押して、其句に妙味なからしめては、立派な詩が出來る筈のものでない、即ち廢物である、

韻脚の七病　古人は韻脚に避くべき七病を擧げてあるから、之を左に述べやう、

韻脚陳腐と云ふことは、古人が毎度用ひ來つて、珍らしからぬ韻字を用ふるものを云ふので、一句の働きがなく、古人の情と同じやうになり易く、却つて風流を失ふことになるから、此場合には、奪胎換骨によつて、陳を化して新と爲すの工夫をすることがよい、例へば身後名とか、死後名などは、已に陳腐であるから、其後に之を韻脚に用ひないで、墓上名とか、逝世名とか云ふやうにやるがよい、これは一例であるが、天、花、友、雲、春、紅、人などの字面は、已に陳腐に屬してゐるから、此等の字を韻脚に押すには、字句を新らしく工夫するやうにせねばならぬ、

韻脚鶴膝　と云ふことは韻字が重くして、自由に歩み乘ねるやうなるを指すもので、韻字に働きがなくて、句作の妨はぬことである、これも避けねばならぬ、

韻脚輕浮　と云ふことは、輕はづみして、句の腰が浮んで落着かぬやうになるを云ふのである、ソレも起句とか承句ならば許すとしても、結句に此弊があつたならば、一首の筋骨を緊ばる力がなく、甚だ好ましからぬことである、

韻脚停滯　と云ふことは、殊更に難險なる韻字を用ふることで、句意に停滯を生ずる弊があるから、可成避けねばならぬ、

韻脚拙劣　と云ふことは、句の意は通ずるとしても、其語が拙なく劣れるを云ふので、學力淺きものは、韻に引かされて自然に不自由にして、其押韻がまづくなり

易いものであるから注意が肝要である、

韻脚不穩　と云ふことは、差したる疵ではないけれども、讀み下だして其意を極め難いやうなのを云ふので、不穩たるを免れない、詩人は此境を知ることが肝要である、古人が常に意を致したのも、此邊に存するのである、

韻脚軟弱　と云ふことは、韻礎に力がなく、句の精神も衰へ弱くなるのを云ふので、殊に結句にあつては、其字が全篇に響かぬから、尤も之を嫌ふのである、

韻脚は自然的なれ　詩は自然的に作成されたるが上乘で、餘り技術的に流れぬやうにすることを心掛くべく、徒らに巧者の一方にのみ馳せて、自然を離れては、到底勝れた詩を得ることが出來ない、況んや險韻難語を用ひて得意がるに於てをやである、唐詩選などを見ても、其韻は、例へば十一眞の韻ならば、春とか、人とか、一先の韻ならば、天とか、泉とかの字面を押して、立派な詩が出來てゐるではないか、碁の石は、黑白二樣だけであるけれども、之を用ひて千變萬化なるが如く、韻字も此と同じやうに、用うる字面は大概定まつてゐても、其使ひ方次第で、自然の聲調を成し、且立派な詩が出來ることを思はねばならぬ、險韻難語必ずしも詩の本領では無い、

和韻のこと　和韻と云ふは、他人の作に和して唱酬するのであるが、これに依韻次韻、用韻の三樣がある、依韻とは、原作の韻を踏まずに、同韻中に在る字を勝手に使用して作るのを云ふのである、次韻とは、原作の韻に和して、前後次第皆其韻字を用ひて作るのである、用韻とは、原作の韻字を用うるも、其前後次第に拘はらざるもので、例へば原作の結句に在る韻字を起句とか承句とかに用うるやうなのを云ふのである、

廣和の例　古人の廣和は、只其來意に答ふるやうに作つたものであつた、卽ち韻の爲に束縛せらるゝやうなことはなかつたのである、杜迢が杜甫に寄する詩に、

相憶無二南雁一何時有二報章一

とやつた、杜甫は之に和して、

雖レ無二南雁一過一　看取北魚來、

と作つて答へた、これを見れば、韻を和せずして、意を取つて答へたと云ふことが分かる。杜甫、王維、岑參が、賈至の七律に和したるのを見ても、原韻を用ひてゐない、然るに中唐以還、元稹、白樂天に至つて、始めて原詩の韻を用うる新調が起つたのである、此等の例は略して置く、

分韻と分字　分韻は、席上にて詩を賦するときに、各韻を分けて詩を作ることである、分韻の場合は得二某韻一と書くが例である、

分字と云ふは、語句を截ち、互に其一字を取り、之を韻脚として詩を作るのである、分字の場合は、得二某字一と書くが例である、分字は絶句ならば、大抵承句結句に其字を押すものである、律詩ならば、第一句を除けば、何れの句に用ひてもよいのであるが、多くは前聯の韻句に押してある、

5、絶句の作例

所謂る四絶　李滄溟が古今の四絶と云はれしは、王翰の涼州詞、李白の早發二白帝城一、王昌齡の從軍行、王之渙の涼州詞である、此等の詩は皆全散格の絶句である、左に之を示さん、

涼州詞　王翰

葡萄美酒夜光杯、欲レ飲琵琶馬上催、醉臥二沙上一君莫レ笑、古來征戰幾人回、

早發白帝城　李白

朝辭白帝彩雲間、千里江陵一日還、兩岸猿聲啼不レ住、輕舟已過萬重山、

涼州詞　王之渙

黃河遠上白雲間、一片孤城萬仞山、羌笛何須怨二楊柳一、春光不レ度玉門關、

從軍行　王昌齡

秦時明月漢時關、萬里長征人未レ還、若使二龍城飛將在一、不レ敢二胡馬度二陰山一

所謂る四大絶句　王阮亭の唱ふる四大絶句と云ふのは、李白の早發白帝城、王之渙の凉州詞、王昌齡の長信秋詞、王維の送元二使安西の詩である、既記以外の二首を左に示さん、

長信秋詞　王昌齡

奉帚平明金殿開、且持團扇暫徘徊、玉顏不及寒鴉色、猶帶昭陽日影來、

送元二使安西　王維

渭城朝雨浥輕塵、客舍青青柳色新、勸君更盡一杯酒、西出陽關無故人、

この王維の詩は、平仄法に於て、上二句と下二句とは相拗してゐる、即ち拗體である、

第八律詩

1、律詩の體

律詩の濫觴　律詩は梁齊の世に其體を形づくつたのである、唐初に至つて對句の詩が流行するやうになり、沈佺期、宋之問などの人々が、八句の詩について聲律を定め、法度を嚴にして、律詩と稱するやうになつたのであるが、その格律は盛唐に至つて大成したのである、

五言律と七言律　五言律は五字の句八句、七言律は七字の句八句より成るものである。律詩は二句を一組とし、此組を聯と呼んでゐる、其名稱は左の如くである、

第一句
第二句　首聯、破題、發句、開句とも云ふ、
第三句
第四句　頷聯、前聯
第五句
第六句　頸聯、後聯　併せて中聯とも云ふ、

第七句
第八句 尾聯、結聯、落句、末聯、結句とも云ふ、

律と起承轉結　王漁洋は、律詩にも起承轉結の法がある、律の作法も此法を離るべからすと論じてある、即ち首聯は起、領聯は承、頸聯は轉、末聯は結に當るのであるとしてあるが、領聯と頸聯は、必ず對偶を用うるが律詩であるから、承轉の法に關するものでない、されば范德機と云ふ人は、起承轉結は之を絶句に施せば可なるも、之を律詩に施せば未だ盡さずと云つた、然り律詩は起承轉結に拘泥すべからざるが穩當のやうである、

2、律詩の平仄式

五言律の平仄式　五言律も五言絶句のやうに、仄起が正格であつて、平起を偏格としてある、又其第一句は押韻しないのが通則である、

仄　起

首聯 □△□○△—又□△△○○押韻の場合、
　　□○□△○韻
領聯 □○○△△
　　□△△○○韻
頸聯 □△□○△
　　□○□△○韻
尾聯 □○○△△—又□○△○△としてもよい、
　　□△△○○韻

平　起

首聯 □○○△△—又□○△○△又押韻の場合は□○□△○
　　□△△○○韻
領聯 □△□○△

□○□△○韻

頸聯 □○○△△—又□○△○△としてもよい、
□△△○○韻

尾聯 □△□○△
□○□△○韻

拗體と失粘格　五言律に仄韻を用うるものは、古人の作にも少ない、又拗體がある、失粘格もある、即ち首聯と頸聯の間に失粘するもの、領聯と頸聯の間に失粘するもの、頸聯と尾聯の間に失粘するものなどである、併し律詩としては、格律の嚴重なるべき筈のものであるから、拗體や失粘格などは學ぶべきものでない、古人の作にも其例は少ない、又五言律は首聯を對句としたのが、古人の作に多くある、蓋句勢を強くする爲には、對句とするがよいのである、

五言律の仄韻格　この格は古人の作にも少ないが、其平仄式は左の如くである、

仄　起

首聯 □△△○○—又□△□○△押韻の場合、
□○○△△韻

領聯 □○□△○
□△□○△韻

頸聯 □△△○○
□○○△△韻—又□○△○△としてもよい、

尾聯 □○□○○
□△□○△韻

平　起

首聯 □○□△○—又□○○△△又□○△○△押韻の場合、
□△□○△韻

領聯 □△△○○
□○○△△韻一又□○△○△としてもよい、

頸聯 □○□△○
□△□○△韻

尾聯 □△△○○
□○○△△韻又□○△○△韻としてもよい、

七言律の平仄式

平起

首聯 □○□△△○○韻一又□○□△□○△踏落しの時、
□△□○□△○韻

領聯 □△□○○△△一又□△□○△○△としてもよい、
□○□△△○○韻

頸聯 □○□△□○△
□△□○□△○韻

尾聯 □△□○○△△一又□△□○△○△としてもよい、
□○□△△○○韻

仄起

首聯 □△□○□△○韻一又□△□○○△△又□△□○△○△踏落しの時、
□○□△△○○韻

領聯 □○□△□○△
□△□○□△○韻

頸聯 □△□○○△△一又□△□○△○△としてもよい、
□○□△△○○韻

尾聯 □○□△□○△

□△□○□△○韻

七言律は第一句に押韻するのが正格である、又踏落としにする場合は、首聯を對句とするが正格としてある、七言律にも、拗體もあり、又失粘格もあること、五言律に異ならぬ、特に注意すべきは、七言律は押韻の句に、孤平孤仄などの出來ないやうに、平仄を融通するがよいのである、

七言律の仄韻格　七言律に仄韻を用うる場合の平仄式は左の通りである、

平　起

首聯
□○□△□○△韻ー又□○□△△○○踏落しの時、
□△□○○△△韻ー又□△□○△○△としてもよい、

頷聯
□△□○□△○
□○□△□○△韻

頸聯
□○□△△○○

尾聯
□△□○□△○
□○□△□○△韻

仄　起

首聯
□△□○○△△韻ー又□△□○△○△又□△□○□△○踏落しの時、
□○□△○○△韻

頷聯
□○□△△○○
□△□○○△△韻ー又□△□○△○△としてもよい、

頸聯
□△□○□△○
□○□△□○△韻

尾聯
□○□△△○○
□△□○○△△韻ー又□△□○△○△としてもよい、

手腕なきものが仄韻を用うれば、調子乱れて殆ど體を成さぬものであれば、初學者は此格を避くるがよい、

2、律詩の作法

五言律と七言律の難易　五言律は作るに難けれども、好詩を成すに易く、七言律は作るに易けれども、好詩を成すに難いと、古人が云つてある、五言律は字の少き丈け新意を出すべき餘地に乏しけれども、古意を失はざるを主として作れば、比較的好詩を得らるゝのである、七言律は五言より二字多き丈け我が新意を出し得るの餘地ある代りに、偶對も用事も、措辭も結響も、穩を貴び切を貴び、老を貴び高を貴ぶを以て、之が渾成を得て、好詩を成すことは實に難しとするのである、又虛字を多く用うれば、本弱に流れ易く、實字が餘りに多く過ぐれば、膚廓に失し、或は呆笨に落ちて、一聯には佳句あるも、句あつて詩なしと云ふものになるから、虛字と實字との使用は、殊に意を致すべきである、

各聯の作法　律詩を作るに領聯、頸聯は工なり易いものであるけれども、尾聯は工なり難く、首聯は殊に工なり難いのであるから、十分の筆力が無ければ、首聯は先づ穩に筆を起すがよいが、氣勢は突兀高遠なるやうに心掛くべきである、領聯は其氣勢は雄贍遒勁なるやうにせよ、併し十分の手腕が無いうちは、唯首聯に接することに注意して、含蓄あるやうにするがよい、頸聯の氣勢は、領聯に對して更に變化あるやうにするがよい、領聯の措辭構想に重複しないやうに意を致すことが肝要である、尾聯に至つては其氣勢は餘力あるやうに筆を着くべきである、

律詩の中聯　律詩は殊に中聯に重きを置くものであるが、此中聯の煉句に四實、四虛、前實後虛、前虛後實などの目が定められてある、實とは風花雪月山川草木などの景を叙ぶるものである、虛とは喜怒哀樂悲嘆などの情を寫すものである、其四實と云ふは、中聯の四句皆對偶に景を叙するもの、其四虛と云ふは、中聯の四句皆對偶に情を述ぶるものである、其前實後虛とは、領聯に景を叙べて、頸聯に情を

叙ぶるもの、其前虚後實とは、領聯に情を述べて、頸聯に景を寫すものである、以上は只其大體について云ふものであるが、其變化は殆ど一々指摘するに遑がない程である、

4、律詩の格

首聯尾聯對せず中聯對する格

早春遊望　杜審言

獨有宦遊人、偏驚物候新、雲霞出海曙、梅柳渡江春、淑氣催黄鳥、晴光轉綠蘋、忽聞歌古調、歸思欲沾巾、（これは四實）

金陵　許渾

玉樹歌殘王氣終、景陽兵合戍樓空、楸梧遠近千官塚、禾黍高低六代宮、石燕拂雲晴亦雨、江豚吹浪夜還風、英雄一去豪華盡、惟有青山似洛中、（これは四實）

陸渾山莊　宋之問

歸來物外情、負杖閑耕源、水看華入、園林採藥行、野人相問姓、山鳥自呼名、去去獨吾樂、無能愧此生、（これは四虚）

隋宮　李商隱

紫泉宮殿鎖烟霞、欲取蕪城作帝家、玉璽不緣歸日角、錦帆應是到天涯、于今廢草無螢火、終古垂楊有暮鴉、地下若逢陳後主、豈宜重問後庭華、（これは四虚）

秋夜獨坐　王維

獨坐悲雙鬢、空堂欲二更、雨中山葉落、燈下草蟲鳴、白髮終難變、黄金不可成、欲知除老病、惟有覺無生、（これは前實後虚）

感懷　劉長卿

秋風落葉正堪悲、黄菊殘華欲待誰、水近偏逢寒氣早、山深長見日光遲、愁中卜命看周易、夢裡招魂誦楚詞、自笑不如湘浦雁、飛來却是北歸時、（これは

前實後虛）

送王錄事赴虢州　岑參

早歲即相知、嗟君最後時、青雲仍未達、黑髮欲成絲、小店關門樹、長河華嶽祠、弘農民吏待、莫遣馬行遲」（これは前虛後實）

寄樂天　元稹

桑辱升沈影與身、世情誰是舊雷陳、惟應鮑叔偏憐我、自保曾參不殺人、山入白樓沙苑暮、潮生滄海野塘春、老逢佳景惟惆悵、兩地各傷無限神」

（これは前虛後實）

首聯、中聯對し、尾聯對せざる格

池上　白居易

嫋嫋涼風動、凄凄寒露零、蘭衰花始白、荷破葉猶青、獨立樓沙鶴」雙飛照水螢」若爲寥落境、仍値酒初醒」

宣政殿退朝晚出左掖」　杜甫

天門日射黃金榜、春殿晴雰赤羽旗、宮草菲菲承委珮」爐烟細細駐遊絲」雲近蓬萊常五色、雪殘鳷鵲亦多時、侍臣緩步歸青瑣」退食從容出每遲、

首聯對せず、中聯尾聯對する格

從軍行　楊炯

烽火照西京」心中自不平、牙章辞鳳闕」鐵騎繞龍城」雪暗凋旗畫」風多雜鼓聲」寧爲百夫長」勝作一書生」

陰山基終日兀坐　范石湖

東風微解凍、仍喜朝來井水清、嚴殘得春全未暖、雲慳和雨最難晴、小窓日煖猶棋局、窮巷更深尙屐聲、莫把攜類嫌暮景、且將閒散替勞生」

首聯、中聯、尾聯對する格

雨多極涼冷

爲知三伏日、已作九秋風、木葉凉應脫、禾苗潤必豐、地偏山吐月、橋斷水浮空、雞犬隣家外、魚蝦小市中、

奉和聖製從蓬萊向興慶閣道中留春雨中春望之作　王維

渭水自縈秦塞曲、黃山舊繞漢宮斜、鸞輿迥出千門柳、客道遥看上苑花、雪裏帝城双鳳闕、雨中春樹萬人家、爲乘陽氣行時令、不是宸遊玩物華、

其他の格　律詩にして、首聯對して頷聯對せず、他は皆普通の格なるを偸春格と云ふ、これは頷聯に對すべきものを、首聯に對せしめたので、言はば梅花が春を偸んで、先づ開くやうなものである所から、斯く名けたものである、其作例、五言律では、杜甫が寒食夜對月の詩、

無家對寒食、有淚如金波、斫却月中桂、清光應更多、仳離放紅葉、想像鳴青蛾、牛女漫愁思、秋期猶渡河、

のやうなのがソレである、七言律では崔顥の黃鶴樓の詩がソレである、

昔人已乘白雲去、此地空餘黃鶴樓、黃鶴一去不復返、白雲千歲空悠悠、晴川歷歷漢陽樹、芳草萋萋鸚鵡洲、日暮鄉關何處是、煙波江上使人愁、

首聯、頷聯共に對せずして、頸聯のみ對するものを蜂腰格と云ふ、これは句勢已に斷へんとして、復續くものなれば斯く名けたのである、賈島が送人下第歸の詩が其例である、即ち

下第唯空囊、如何住帝鄉、杏園啼百舌、誰醉在花傍、淚落故山遠、病來春草生、知音逢豈易、孤棹負三湖、

のやうなものがソレである、又一意格と云ふがある、この格は八句對せず、格律聲病の外に出でゝ、縱横放肆なるものである、併しながら、外、整はざるやうなれども、中、實は節に應じてゐるのである、王維が終南別業の詩に、

中歲頗好道、晚家南山陲、興來每獨往、勝事空自知、行到水窮處、坐看雲起時、偶然値林叟、談笑滯還期、

の如く、首聯より尾聯まで、全篇の趣一續きして流れの如くに、一句は一句を生ずるものである、此等の格は造次の能くする所でない、扇對格と云ふは、首聯頷聯が扇對をなして、頸聯と尾聯は普通なるものあり、又、中聯丈け扇對をなすもあり、首聯、中聯、尾聯共に扇對をなすもある、蓋しこの格は今體の詩の特異なるものである、此外にも諸種の格あれども、茲には一々續述することを避けて置く、

第九　排律

1、排律の體

五言排律と七言排律　彼の律詩は情景を寫して、四十字若くは五十六字で出來てゐるものなるも、排律には句數に制限なく、凡六韻より十韻、二十韻、百韻、二百韻に至るも妨げない、排の字義は列にして、おしならぶるの意である、即ち儷句を數多聯ねるのが排律である、故に排律を長律とも呼んでゐる、

排律は、齊の顏延之、謝朓などに淵源したもので、梁陳以還、儷句最も切になり、唐に入つてから、始めて之を專らにするやうになつてより、排律と名けられたのである、唐の世に士を取るには、多く十二句の排律を作らせた所から、排律は先づ十二句のものを以て本體としてある、

排律の各聯　排律にも五言がある、七言がある、句數は制限は無いけれども、十二句以上幾韻に至るも厭はない、而して其句法も律詩と同樣であるが、篇法は非常に律詩と異なつてゐる、即ち排律も律詩と同じく、二句づゝを一組とし、聯を以て稱することゝなつてゐるが、其聯の名稱は、首聯、頷聯、頸聯、腹聯、後聯、尾聯としてあつて、之を列開すれば左の如くである、

第一句
第二句　首聯
第三句　頷聯

第四句
第五句　頸聯
第六句
第七句　腹聯
第八句
第九句　後聯
第十句
第十一句　尾聯
第十二句

首聯と尾聯とに散句を用うるの外、他の各聯は、皆偶對を用うるが排律の作法である、

2、排律の平仄式

五言排律の平仄式　五言排律に平仄式あることは、律詩と異なる所はない、

五言排律仄起式即ち正格

首聯　□△○○△
　　○○△△○韻
頸聯　□○○△△
　　□△△○○韻
頸聯　□△○○△
　　○○△△○韻
腹聯　□○○△△
　　□△△○○韻
後聯　□△○○△
　　○○△△○韻

尾聯 □○○△△
□△△○○韻

五言排律平起式即ち偏格

首聯 □○○△△
□△△○○韻

領聯 □△○○△
○○△△○韻

頸聯 □○○△△
□△△○○韻

腹聯 □△○○△
○○△△○韻

後聯 □○○△△

尾聯 □△△○○韻
□△○○△
○○△△韻

要するに五言排律の平仄式を早合點するには、首聯と領聯の式を繰かへして排列するものと思へばよいのである、但五言律に於ける平仄式は稍寛にして、第三字は時に拗して△○○△○とすることあれども、排律に至つては、此等の孤仄を忌むから、概ね規則通りに、平仄を整へるやうにするがよいのである、首聯は散句で差支はないが、唐人の作は多く對句を用ひてゐるやうである、

七言排律の平仄式　七言排律平起式即ち正格

首聯 □○□△△○○韻
□△□○□△○韻

領聯 □△□○○△△

□○□△△○○韻

頸聯以下の平仄式は、首聯と頷聯を繰りかへすものと思へばよい、但其場合には、首聯の第一句に押韻したるは、押韻しないことに心得よ、

七言排律仄起即ち偏格

首聯
□△□○□△○韻
□○□△△○○韻

頷聯
□○□△□○△
□△□○□△○韻

頸聯以下は、首聯と頷聯を繰りかへすものと思へばよい、但首聯の第一句は押韻しないで繰りかへすものと知れ、十二句以上の句に在つては、幾韻に至るも、唯後聯と尾聯を展開すればよいのである、

3、排律の作法と作例

各聯の作法　排律は、首聯に於て全題を點破し、頷聯で題意を揭ぐるやうにし、頸聯で上を承け下は體に近づけて相陳べ、腹聯で全體の現はるゝやうに、切實に發揮すべく、後聯には腹聯で盡さざる所を補ふべく、若し補足するの要がなければ、故事故典などを援引するがよい、而して尾聯で結束するのである、

大體は斯やうであるけれども、排律は句に變化がないと、平板に流れて、殆ど讀むに堪へないから、之を避けやうとするには、句に蜂腰とか、鶴膝とか、馬跡などの三法を彼此用うるやうに注意するがよい、蜂腰と云ふのは、五言の第三字、七言の第五字に單讀する字を置くことである、例へば兵符闕三帝閽　天策動三將軍　の句に於ける、闕字、動字がソレである、鶴膝と云ふのは、五言の第四字、七言の第六字を單讀するやうにするので、雨露思偏近、陽和色更濃なるの句に於ける偏字、更字の如きがソレである、馬跡と云ふのは、五言の第五字、七言の第七字を單讀するやうにするのである、夜雪開山暗、風猪草木稀の句に於ける、暗字稀字がソレであ

る、此等の句法を參差として用ふれば、平板の調子を免かるゝものである、要するに排律の法は、古人が首尾開闔、波瀾頓挫の八字で盡くしてゐると云つたのを念頭に置くがよい、

排律の作例　五言排律は唐人の作多くあれども、七言排律に至つては、作者が少ない、唐詩選を見ても、五言排律はあれども、七言排律の無いのを見ても分かる、左に杜甫が行二次昭陵一の五言排律を例示せん、

舊俗疲二庸主一　群雄問二獨夫一　識歸龍鳳質、威定虎狼都、天屬尊二堯典一　神功協二禹謨一　風雲隨二絶足一　日月繼二高衢一　文物多師レ古、朝廷半老儒、直詞事戮辱、賢路不二崎嶇一　住者災猶降、蒼生喘未レ蘇、指揮安二率土一　盪滌撫二洪鑪一　壯士悲二陵邑一　幽人拜二鼎湖一　玉衣晨自舉、儼馬汗常趨、松柏瞻二虛殿一　塵沙立二暝途一　寂寥開闔日、流恨滿二山隅一

第一〇　古詩

1、古詩の體

五言古詩と七言古詩　古詩は近體に對しての稱呼である、古詩は分けて五體とするが通例である、即ち歌體、行體、吟體、引體、曲體がソレである、

歌體と云ふのは、情を放ち言を長くして、心に思ひ胸に浮ぶことは、何にても其儘言ひ出でゝ憚らぬものである、

行體と云ふのは、步驟馳騁、蹴して滯らず、すら〳〵と流出すること、文字の行體に於けるやうなものである、蓋歌は本と樂府の流派であつて、行は歌中の一體である、その歌とその行とを兼ねたものを歌行と云ふのである、

吟體と云ふのは、蚓蟲の吟ずるやうに、自然に悲哀悽惻の調を成し、以て其鬱を伸ぶるものである、

別體と云ふのは、事の本末を次第して叙述し、其感を抽くものである、

敍體と云ふのは、委曲情を盡くし、細大漏さず述べて、其辭を盡ふものである、

古詩にも五言もあれば七言もある、其五言古詩は、蘇武と李陵の二人が、唱酬の作に始まるとしてある、七言古詩は、武帝が柏梁の聯句に始まりしことは、既に述べてある通りである、

短古と長古　古詩は句の長短によりて、長古、短古に分たれてゐる、五言に在つては十六句以上が長古で、以下が短古である、七言に在つては、二十四句以上が長古で、以下が短古としてある、

古詩
- 五言古詩
  - 五言短古
  - 五言長古
- 七言古詩
  - 七言短古
  - 七言長古
  - 唐の歌行體

2、古詩の作法

五言短古　五言の短古は、突兀として起り、悠然として收むるやうにすべく、其題緒の整然たるが如きは敢て望む所ではない、其辭は簡にして意味長かるべく、分明に說かないで、餘味のあるやうにするのが上乘なのである、

五言の短古に、五句の詩と六句の詩とがある、其作法を云へば、五句の詩は第四句にて一應結びを付け、更に一句を轉じて餘韻あらしむるやうにするのである、これは晉樂府の前溪歌に始まつたとしてある、

前溪歌

黃葛結蒙蘢、生在落溪邊、花落逐水去、何當流順還、還亦不復還、

六句の詩は、唐の陳子昂が薊丘覽古などを正宗とすべきにて、首尾の四句は含蓄を十分ならしめ、中の二句は對偶を用ひてもよい、

薊丘覽古

南登碣石館一遙望黃金臺一丘陵盡喬木、昭王安在哉、已圖悵已矣、驅レ馬復歸來、

五言長古　五言長古は、其舖叙に倫次あり、起結の整齊なるを要するもので、古人は五言長篇の法について、分段、過脉、過照、讚嘆の四要あることを述べてあるから、大要を玆に記さん、

分段　先づ一篇を幾段にか分載して、一段ごとに一意を述べ、首段には一篇の意を叙し、結段は首段に照應するやうにするのが、分段である、

過脉　前段より後段に移る過渡の處には、兩句を用ひて、一句は上を結び、一句は下を起すやうにするのが過脉である、

過照　每段着筆の間に、筆々廻顧して、題を照らすやうにするのが過照である、

讚嘆　每段に一消息の語を出して、讚嘆するので、音節が迫促せざるやうにすることを要するのが讚嘆である、

以上の四要は、杜甫の北征と題する五言長古の作に備つてゐるから、作詩家は之を參玩するがよい、

七言短古と長古　七言短古の詩は、矯健にして短兵相接すが如くなるを貴ぶのである、其七言五句の短古と、七言六句の短古は、既に述べたる五言の短古と、大體に於て趣を異にした點はない、

七言長古に至つては、舖叙を要し、開闔を要し、迢遞を要するもので、最も庸俗軟弱を忌む、王漁洋は七言古の章法は、波瀾壯闊・頓挫激昂、大開大闔なるべしと云はれた、七言長古の作法については、古人も之を論明したるもの多々あれども、今之を說述することは、唯煩を增すのみなれば、玆には杜少陵が「孔巢父謝病歸遊江東、寄李白」と題したる古詩を引用して、章法の大要を悟るの便に供せんに、其詩は章を分けて四段としてある、首段には

巢父掉レ頭不レ肯レ住、東將入レ海隨鯨鯢、詩卷長留天地間、釣竿欲レ拂珊瑚樹、

の四句を以て巢父が江東に往くを叙べたもので、其言句は起し得て飄忽の趣がある、次段には

深山大澤龍蛇遠、春寒野陰風景暮、蓬萊織女回二雲車一、指二點虛無一是征路、

の四句を以て東遊の景を寫して、其語は縹緲恍惚の趣がある、三段には

自是君身有二仙骨一、世人那得レ知二其故一、惜レ君只欲二苦死留一、富貴何二如草頭露一

の四句は、孔巢父が隱志已に決したるを稱したものである、末段には

葵候者靜者意有レ餘、清夜置酒臨二前除一、罷レ琴惆悵月照レ席、幾歲寄レ我空中書、

南尋禹穴見二李白一、道甫問訊今何如、

の六句を出して、孔巢父を送り李白に呈するの意を結んである、段落も歸題も分明を極めてある、これ學者の正鵠とすべき所である、孔巢父は竹溪六逸の一人で、東遊して世を遁れんとしたのであるから、篇中多く神仙の事が言つてあるのである、

右は作法の一例を示したのに過ぎないが、詩作家は宜しく唐人の詩殊に杜甫、岑參などの古詩を參玩して自ら悟るがよい、

3、古詩平仄法

古詩の平仄　古詩は已に變體であるから、絶句や律詩などのやうに、平仄の粘せない所が、今體と異つてゐるのである、併し古詩には自ら古詩の平仄法があるから、漫然之を無視して、只篇の長きを以て古詩と心得るやうなことは甚だ宜しくない、現代の作詩家は兎角平仄法を無視する風があるが、正格なる古詩を作らんとならば、宜しく平仄法を眼中に留め置くべきであると思ふ、以下其平仄法について述べん、

關捩のこと　古詩の平仄法に關捩と云ふがある、五言古詩でも、七言古詩でも、出句即ち押韻せない句の下三字を仄三連として、對句即ち押韻する句の下三字を平三連とすることで、標記を以て示せば、五言絶句、五言律では

□○○△△、　□△△○○

とあるのを、關捩即ち古詩の平仄式では

□○△△△　□△○○○

とするのである、又七言絶句、七言律では、

□○□△□○△　□△□○□△○

とあるのを、關捩によるときは、

□○□△△△　□△□○○○

とするのである、仄韻詩は、右の反對であるから、別に之を述べない、

拗音のこと　關捩は右のやうであるが、平仄を整ふるに拗音と云ふことがある、五言の下三字を仄三連としたるときは、上の二字平にして之を拗はねばならぬ、又五言の下三字を平三連としたるときは、上の二字を仄にして拗はねばならぬ、例せば左の如くである、

○○△△△　△△○○○

七言も之と同じことで、下三字を仄三連にして、第二字も仄なるときは、第四字は必ず平にして之を拗はねばならぬ　又七言の下三字を平三連として、第二字も亦平なるときは、第四字はす必仄にして之を拗はねばならぬ、

猶玆に一言して置くことは、五古に五平五仄のものがあり、七古に七平七仄のものもある、仄のものがあり、七古に七平七仄のものもある、これ亦具體たるを失はぬとしてある、併し此等の作は、平仄の迹を見ざるやうに手腕を要するものであつて、初學者は學ばぬがよい、

所謂る古詩平仄法　古詩の平仄法としては、太要下の如くするのがよい、

七言古詩の一韻到底格にあつては、律句を避くるのがよいので、對句は第四字を仄、第五字を平とすべく、其句尾が平三連なるときは、第二字を仄とすべく、句尾が平仄平なるときは、第二字を平とするのであるが、第四字は必ずしも仄とするには及ばぬ、又出句は、第二字を平とすべく、落句の第二字は仄とするのであるが、

これは平としても構はぬことになつてゐる、此等の諸則を一括して、記憶に便するのは、李白の山中答人の詩である、此は一見絶句のやうであるけれども、實は古詩で、平韻到底格の平仄法を示すために設けられたものと云ふことが出來る、即ち左の如くである、

問余何意栖碧山、笑而不答心自閒、桃花流水杳然去、別有天地非人間

對句の第五字平なるべしと云ふは、栖、心、非の三字皆平なるを以て知られる、次に第四字仄なるべしと云ふは、意、答、地の三字皆仄なるを以て知られる、其他句尾の平三連となるのは、非人間、平仄平となるのは、栖碧山、心自閒の各三字で明かである、又平三連に對する第二字のは有字仄、平仄平に對する第二字の平は而字、出句第二字の平は、花字、落句第二字の仄は有字、甚だ分明である、要するに平韻到底の古詩は其平仄法は右のやうなるが法則であるけれども、古詩は已に變體であるから、其平法仄も稍寛に取扱つて左の如くにすればよいと思ふ、即ち五言平韻の古詩ならば、對句の第三字を平とし、第二字は拗音で仄とすること、七言平韻の古韻ならば對句の第五字を平とし、第四字は拗音で仄とするだけでよい、

仄韻到底の古詩は、律句を用うるも深く咎めない、其平仄法も平韻到底の場合より、も、稍寛にしてよい、即ち第二字第五字を以て關捩とすればよいのである、例へば

李花初發君初病、我往看君君花轉盛、

走馬城西一惆悵歸、不見千株雪相映、

蓋仄韻の場合は、二句を以て音節を作し、平韻の場合のやうに、一句中必ず二五を以て關捩をなすが如きものではない、

換韻の古詩にあつては、每句の平仄は、律句を以て準繩とすべきものであること、白樂天の長恨歌、王勃の滕王閣の詩などを見て分かる、併し換韻格は換韻に重きを置くものであるから、必ずしも拘泥しないでよい、尙換韻のことは、次ぎの韻法の部に說いてある、

4、古詩の韻法

古詩の韻について　古詩は、首句と出句とを除くの外は、全篇同一韻を用うるものがある、之を一韻到底格と云つてゐる、又毎句に押韻するものがある、之を毎句用韻格と云つてゐる、又換韻格と云ふがある、即ち二句ごとに韻を換ふるものあり、三句ごとに韻を換ふるものあり、或は四句五句、若しくは六句八句ごとに韻を換ふるものあり、或は十句十二ごとに韻を換ふるものもあつて、必ずしも一定してはゐないが、換韻の場合には、解を逐ふて韻を換ふるものと、段を逐ふて韻を換ふるものとの二様がある、

換韻と平仄互用　換韻は、四句を一解とし、解ごとに換韻するのが、古詩の常調としてあるから、其作例は古人にも甚だ多い、又段を逐ふて韻を換ふるものは、段に長短があり、或は六句或は八句、或は十二句を一段とし、段毎に韻を換へ意を轉じするもので、二段より數段に至るものである、

換韻は、平仄互用するのが常法である、即ち第一解が平韻ならば、第二解には仄韻、第三解には平韻、第四解には仄韻と云ふやうに平仄を交互にするのである、段を逐ふて韻を換ふるものも、段ごとに平韻と仄韻とを互用するのである、勿論これは常法であるから、平仄互用しない換韻の仕方も澤山あるのである、又、換韻したるときは、其換韻の初めの句は、押韻することになつてゐる、

逐解換韻の例　左に四句一解ごとに換韻したる作例を示さん、

韻王閣　王勃

滕王高閣臨江渚、佩玉鳴鑾罷歌舞、畫棟朝飛南浦雲、朱簾暮捲西山雨、（以上の四句で一解）閒雲潭影日悠悠、物換星移幾度秋、閣中帝子今何在、檻外長江空自流（以上四句で二解）

この篇は二解二韻、平仄互用である、その第一解は景を叙し、第二解は懐を寫したのである、凡八句の古詩、多くは此韻法である、唐詩選に載する所の、宋之問の

至端州驛の詩、岑參の登古鄴城の詩、韋員外家花樹歌、衛萬の吳宮怨の詩などは皆此格である、

逐段換韻の例　左に段を逐ふて換韻したる作例を示さん、

贈清漳明府姪聿　李白

我李百萬葉、柯條布中州。天開青雲器、日爲蒼生憂。（これ一解）小邑且割雞、大刀佇烹牛。雷聲動四境、惠與清漳流。（これ二解以上一段）絃歌詠唐堯、脫落隱簪組。心和得天眞。風俗猶太古。（これ三解）牛羊散阡陌、夜寢不扃戶。問此何以然、賢人宰吾土。（これ四解以上二段）舉邑樹桃李、垂陰亦流芬。河堤繞綠水、桑柘連青雲。（これ五解）趙女不治容、提籠畫成群。繰絲鳴機杼、百里聲相聞。（これ六解以上三段）訟息鳥下階、高臥披道帙。蒲鞭掛簷枝、示恥無撲挾。（これ七解）琴清月當戶、人寂風入室。長嘯無一言、陶然上皇逸。（これ八解以上四段）白玉壺冰水、壺中見底清。清光洞毫髮、皎潔照群情。（これ九解）

趙北美嘉政、燕南播高名。過客覽行謠、因之誦德聲。（これ十解以上五段）

この篇は八句を一段とし、五段五韻、平仄互に用う、首一段は先づ明府の才德を叙して起とし、二段は風俗の淳古を叙し、三段は人生業に安んずるを叙し、四段は訟なきを叙し、五段は明府の廉潔嘉政を叙し、遂に首段に應して收束を爲したのである、

5、古詩の諸格

一韻到底格　この格は、大抵四句を一解として意を轉じ、章法は整齊なるが常法としてある、作例として韓文公の古詩を示さん、

謁衡嶽廟遂題門樣

五嶽祭秩皆三公、四方環嶽鎮當中、火維地荒足妖怪、天假神柄專其雄、噴雲泄霧藏半腹、雖有絕頂誰能窮、我來正逢秋雨霽、陰氣晦昧無清風、潛心默禱若有應、豈非正直鑑感通、須臾靜掃來峰出、仰見突兀插青空、衆巒遠延

接天柱」石廩騰擲推祝融」森然魄動下馬拜、松柏一逕趨靈宮」粉墻丹柱動光彩」鬼物圖畫塡青紅」升階偃僕爲酺酒」欲以菲薄明其衷」廟令老人識神意、睢盱偵伺能鞠躬、手持盃珓導我擲、云是最吉餘難同、寡逐蓬荒幸不死、衣食纔足甘長終」侯王將相望久絕、神纔欲禍難爲功、夜投佛寺上高閣」星月掩映雲朧朧、猿鳴鐘動不知曙、杲杲寒日生於東、

右によつて、對句の第四字第五字は、必ず仄平になつてゐることが分かるであらう、

每句用韻格　この格は、句毎に韻を押すもので、杜甫の飲中八仙歌の如きが其である、

知章騎馬似乘船、眼花落井水底眠、汝陽三斗始朝天、道逢麴車口流涎、恨不移封向酒泉、左相日興費萬錢」飲如長鯨吸百川」銜杯樂聖稱避賢、宗之瀟灑美少年、舉觴白眼望青天」皎如玉樹臨風前」蘇晉長齋繡佛前、醉中往往愛逃禪」李白一斗詩百篇、長安市上酒家眠、天子呼來不上船、自稱臣是酒中仙、張旭三杯草聖傳、脫帽露頂王公前、揮毫落紙如雲烟、焦遂五斗方卓然、高談雄辯驚四筵」

逐解轉韻格　この格は前已に例示したる所であるが、古今の詩家、其作例が澤山ある、玆に王安石の桃源行を示さん、

望夷宮中鹿爲馬、秦人半死長城下、避時不獨商山翁」亦有桃源種桃者」」此來種桃經幾春」、採花食實枝爲薪、兒孫生長與世隔、聞有父子無君臣」漁郎漾舟迷遠近、花間相見因相問、世上那知古有秦、山中豈料今爲晉」聞道長安吹戰塵」春風回首一沾巾、重華一去事復得、天下紛紛經幾春」」

逐段轉韻格　この格も前已に例示したるが、此格は段に長短があつて、段毎に韻を換へて意を轉するので、二段より數段に至るものであるが、前後の句數を同じかちめ、章法の整齊なるを尙び、平仄の互用を常法としてある、玆に王維の老將行を

擧示せん、

少年十五二十時、步行奪取胡馬一騎、射殺山中白額虎、肯數諸下黃頭兒、一身轉戰三千里、一劍曾當百萬師、漢兵奮迅如二霹靂一、虜騎崩騰長二蒺藜一、衛青不敗由二天幸一、李廣無功緣二數奇一、』自二從棄置便衰朽一、世事蹉跎成二白首一、昔時飛箭無二全目一、今日垂楊生二左肘一、路傍時賣故侯瓜、門前學レ種先生柳、蒼茫古木連二窮巷一、寥落寒山對二虛牖一、誓令二疎勒出二飛泉一、不レ似二潁川空使一レ酒、』賀蘭山下陣如レ雲、羽檄交馳日夕聞、節使三河募二年少一、詔書五道出二將軍一、試拂二鐵衣一如二雪色一、聊持二寶劍一動二星文一、願繳二燕弓一射二天將一、耻令二越甲鳴二吾君一、莫レ嫌二舊日雲中守一、猶堪二一戰立二功勳一、』

二句一轉格　これは二句毎に韻を轉ずるもので、二句を一解としてあるもので、音節が短促してゐる、作例も多く無い、殊に長篇のものは無い、韓愈の汴州亂第二首を例示せん、

母從子走者爲レ誰、大夫夫人留後兒、』昨日乘レ車騎二大馬一、坐者起趨乘者下、』廟堂不二肯用一干戈一、嗚呼奈二汝母子一何、』

三句一轉格は、三句を一解として、三句ごとに韻を換ふるもので、促句詩とも呼ぶものである、これは四句あるべきを、一句促めてあるから斯く名づけてきたのである、作例少なけれども、亦一格としてある、蘇軾が次に韻黃魯直書馬一と題する促句詩を示さん、

少年鞍馬勤二遠行一、臥聞乾レ草風雨聲、見此忽思短策橫、』十年髀肉磨欲レ透、那更陪レ君作二詩瘦一、不如芋魁歸飯豆、』門前欲レ嘶御史聰、詔恩三日休二老翁一、羨君懷中雙橘紅、』

換韻句數長短不定格　この格は韻を換ふるにも、二句四句六句八句等長短定らざるものであつて、古風歌行の韻法である、作例最も多い、劉希夷の公子行の一節を例示せん、

天津橋下陽春水、天津橋上繁華子、馬聲廻合青雲外、人影動搖綠波裡（以上四句一韻）綠波清迴玉爲レ沙、青雲離披錦作レ餙、可レ憐楊柳傷レ心樹、可レ憐桃李斷レ腸花、此日邀遊邀二美女一 此時歌舞入二娼家一、（以上六句一韻）

起二句一轉格　これは起二句に一韻を用ひ三句以下韻を換へて、後は句の長短に拘らず、終りまで其韻を疊み下だすものなれば、一詩只兩韻のみであつて、前は句少く、後は句多し、蓋しこれを葫蘆句と云ふ、葫蘆の形を以て名づけられたのである、劉貞が贈從弟の詩は其例である、

亭亭山上松、瑟瑟谷中風（起二句東韻）風聲一何盛、松枝一何勁、氷霜正慘悽、終歲常端正、豈不レ羅二凝寒一 松柏有二本性一（三句以下敬韻）

この詩起二句平韻を用ひ、風の字をたゝんで一轉し、後六句は仄聲を用ひたのである、

起四一轉括　この括は起四句一解の後韻を換へて、以下幾解に亘るも一韻を押すものである、これ亦前少後多の韻法で、葫蘆韻と同格である、李白の獨酌二清溪江一寄二權昭夷一の詩がソレである、

我携二一樽酒一 獨上江邨石、自二從天地開一 更長幾千尺、（起四句陌韻）畢レ懷向レ天笑、天廻日西照、永賴坐二此石一 長垂嚴陵釣、寄謝山中人、可二與レ爾同一レ調（五句以下嘯韻）

この篇、起一解は入聲の韻を用ひ、後六句は去聲の韻を用ひてある、

其他の格　句の長短に拘はらず、初め一韻を押して、唯末の二句丈けを一解とし、韻を換へて收束するものを結二句換韻格と云つてゐる、其結の四句丈けを換韻するものを結四句換韻格と云つてゐる、用單句格とて、短句を挿ひものがある、これを單殺の法と云つてゐる、これは二句を一句に促めたものであるから、其單句に改ゝ必ず押韻するの弊極端なりである、大風起兮雲飛揚、威加二海內一兮歸二故鄉一 安得二猛士一兮守二四方一の如きは、未單句を用ひたるものにて、五句一解の詩である、尙他

に五七言錯綜したるもの、長短句錯綜したるもの等の格があつて、音節に合せんとするには、甚だ手腕を要するものである、此等の説明は暫く略して置く、

作詩講義終

大正七年十二月廿七日印刷
大正七年十二月三十日發行

定價金七拾錢

茨城縣東茨城郡常磐村四千九百二十六番地
編輯兼發行人　田口義治
茨城縣水戸市上市南三ノ丸二番地
印刷人　柴謙吉
茨城縣水戸市上市南三ノ丸二番地
印刷所　柴合名會社
茨城縣東茨城郡常磐村四千九百二十六番地
發行所　楓外詩壇

終